明治卅六年四月五日第三種郵便物認可　毎月一回一日發行

家庭雜誌

第四卷

第四號

明治三十九年四月一日發行

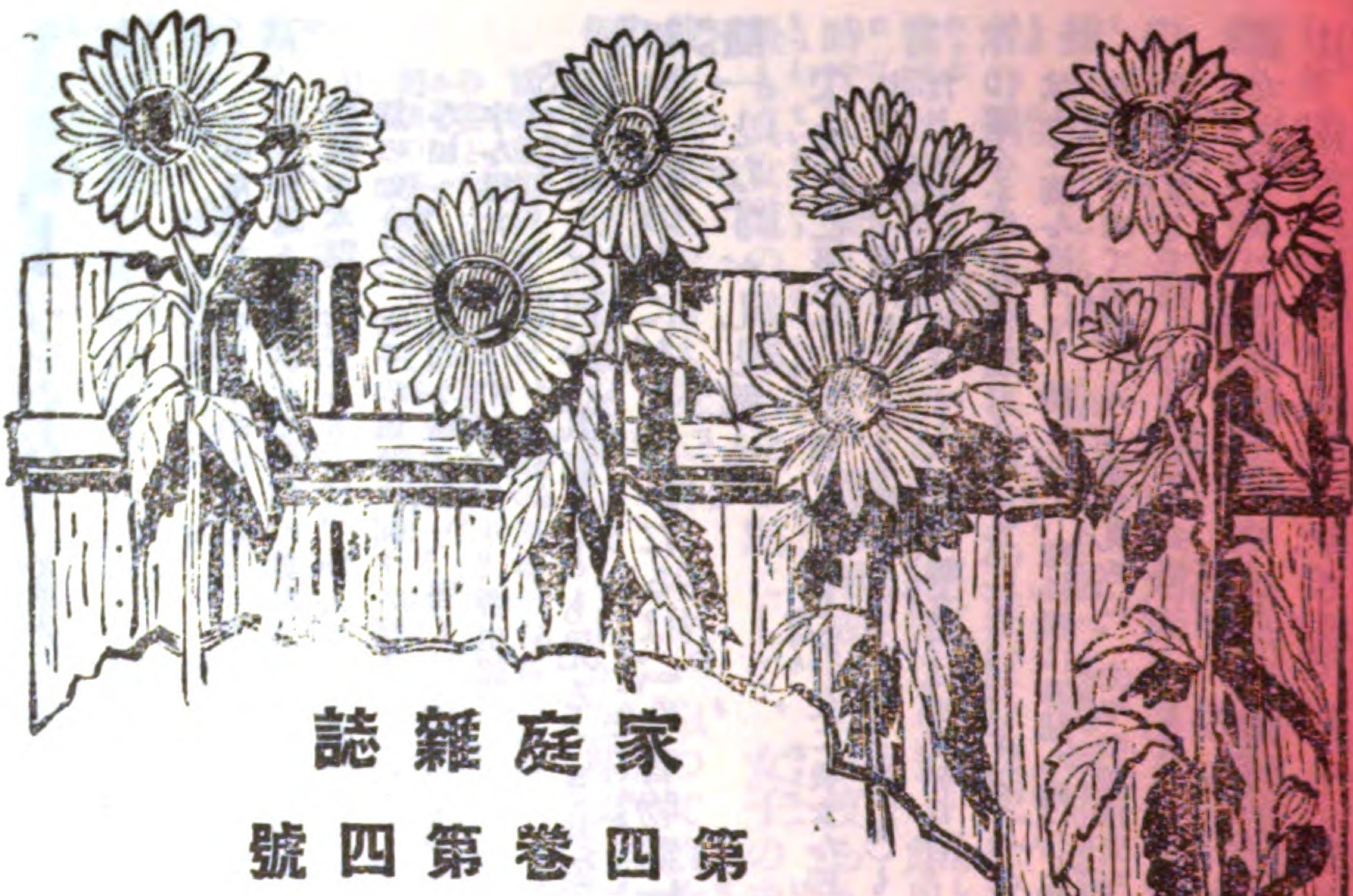
Dai 4 Kan.　KATEI ZASSHI　Dai 4 Gō.

由分社

東京市麹町區元園町壹丁目廿七番地


最新化粧料皮膚有効
ブリアンチン
藥學博士
下山先生御證明
皮膚病專門獨逸ドクトル
加藤先生御證明
此ブリアンチンは両専門大家御證明の如く適當なる原料を配伍し且つ高等の香料を加合したる最新化粧料にして皮膚衛生上及び交際場裏には必要欠くべからざるものなり世の夫人令嬢方速に用ゐて眞價を知り玉へ
用法
ブリアンチンは湯より上りたるとき。顔を洗ひたるとき。水おつかひたるとき。おしろいをつけるとき。手のひらにてぬるべし
又おしろい下としてはブリアンチンにまさるものなし
定價
大瓶 貳拾八錢
小瓶 拾五錢
特別(御進物用)参拾五錢
發賣元 東京市京橋區南紺屋町 三光堂
電話新橋四〇二三番

(大國社意匠)



家庭雜誌

第四卷第四號

明治三十九年四月一日發行

生涯幾度の花

或人に與へたる手紙

人の一生涯には幾度も〳〵花が咲く。最初の一つが萎んだとて、直ぐに一生涯を思ひすてるのは、あんまり量見が狹すぎる。

廿前後の花盛り、光り輝く娘すがたを第一の花とすれば、子供の五六人も引つれた、三十四十の年増姿が即ち第二の花となる。そして此の第二の花は、第一の花に比べて一段深い趣味がある。それから又、五十となり、六十となり、七十となり、老境に第三の花が咲く。そして此の第三の花は、第一第二に比べて一段高い趣味がある。紅顏ばかりが美ではない、花ではない。中年圓熟の美もあれば、晩年白髮の花もある。

然し是は順當に行つた人の身の上。最初の花だけで死ぬる人もあれば、よし生きて居ても、二度目、三度目の花の咲かぬ人もある。それに引きかへ、最初の花が咲きそこなつて、中年に第一の花を開く人もある。中年にも又咲きそこなつて、晩年始めて眞の花を開く人もある。又、最初の花の咲きそこなつた結果として、中年の花は色も形も飛びはなれた、然しながら又特別の趣味のある、變則の美を呈する人もある。

（以下八頁につゞく）

貞女道を批評す

中尾清太郎

△中尾君が其の進歩的の思想と、其の優麗なる文章と、其の該博なる引證と、及び其の多年の教育上の經驗とを以て、屢々有益の論説を本誌に寄せらるゝは、吾人の深く感謝する所なり。殊に本篇の如きは、女子の道德に關する舊思想を批評して、其根本に斧を加へ、鋭利痛切を極めたり。吾人は本號の卷頭に斯の如き大文字を得たるを誇とする者なり。（堺生記）

貞女道とは何か。其萌芽とも見るべき具象的事實の、初めて物の本にあらはれたるは、『今昔物語』を以つて随一となすべしと雖も、

「今昔物語」第三十。夫（聟）を亡ひし女、父に後女を迎へよと勸められけるに、「男に具すましき報のあればこそ、彼（聟）も死にたらめ。たとひ夫を儲けたりとも、身の報ならば亦も死なむ。見たまへ。軒に巣くふ燕も後は並ばましきを、」とて諾はず。父ようこそあれとて、試みに燕を捕へて、雄は殺し、雌は頸に赤紐を附けて放ちやりけり。年めぐり來て舊巣に入る燕を見るに、去年の雌は夫をも儲けず、子燕のみ具して歸りけり。女の父悟りて、もはや強いざりきとなむ。

貞女道といふ道德觀念が、明かに倫理的に確立したるは、鎌倉以後に在るを信ずる也。やはり武士道の發達と相伴うて、次第に成形したるものゝ如し。否寧ろ武士道の女子教育に應用せられたるもの、即ち貞女道なるが如し。されば其發達の起源に溯りて之を言へば、武士道は兄にして、貞女道は妹にも似たる關係あり。而して、武士道が其初經典なかりしが如く、貞女道にも亦固より經典といふもの存せざりき。唯歴史と傳記と經驗と修養とを積みて、男子に武士道成り、女子に貞女道成りしのみ。されば鎌倉權五郎景政、佐野常世は武士道の古き型にして、靜御前、虎少將は貞女道の遠き鏡なりし也。「いざ鎌倉」といふが武士道の觀念なりしならば、『貞女兩夫に見えず』といふは、貞女道の最高理想なりし也。是等の理想觀念、若しくは個人の傳記は、儼に武士道を作り、貞女道を作るに餘師ありしを見る也。蓋し前者は專ら主從の關係より生じ、後者は前者の影響を受けて、更に宋儒の所説と相合うて、愈々鞏固なるに至りしもの也。

かの泰時が制定したる貞永式目五十一條は、武士道の最古の經典たると共に、亦貞女道のそれなるなから

む歟。その中最も注意すべきは、他人の妻を密懐する者は、強姦と和姦とを論せず、雙方共同科たるべき事の一項に在るべし。強姦（此語を屢々淑女諸君の前に繰り返すことは、余が最も堪へざる所也。）を行ひたる者の罰せらるべきは、今日の法律にも明文ありと雖も當時は強姦せられたる者も同罪なりき。（此思想は德川時代にも殘り居りて、喧嘩兩成敗の法度ありき。）これ最も貞女道の發露したる點にして、女子の決然たる自裁を默示したるものに外ならず。以つて貞女道の、如何に秋霜烈日の威を帶びたりしかを味ふべき也。

國姓爺鄭成功の母は、長崎の田崎七左衛門の娘にして、亡命支那人の妻となりしほどの寛量ありながら、成功が明朝恢復の擧も敗れて、味方の手弱くなりし時、無慚や、敵軍の士の爲に辱められて自殺せりき。

斯くの如き貞女道は歷史を降下し行くに隨ひ、或は光秀の妻、或は勝頼の妻、或は一豐の妻、或は重成の妻、或は忠興の妻等の活ける模範の教育を受けて、漸く女子の頭腦にそれが明白なる倫理的觀念として生動するに至れりと謂ふべし。而して其最も發達し、殆ど絕頂に達したる時ともいふべきは、勿論德川時代に在りとすべし。蓋し元和偃武の後、文教靡然として行はれ、遂に元祿の泰平を呈するに及んで、肉慾の天國あらはれ、こゝに反動の氣を喚起して、山鹿素行の武士道奬勵となり、貝原益軒の貞女道鼓吹とはなりし也。『和俗童子訓』『女大學』の流行は、蓋し此時なりき。其唱ふる所、主として敬順を說き、所謂三從七去を說き、（益軒は流石に惡疾と石胎とは天命なれば已むを得ずと云へりしかど、）男女七歲席を同うせずといひ、女子十歲外に出でずと誡め、夫婦は義を以ッて本とすと說きし也。而して男尊女卑の思想と『家』本位の思想とは一夫多妻を認め、妻妾同棲して嫉妬なきを稱揚し、個人性の如き、女權の如き、夫の前、舅の前、『家』の前に、は總て蹂躙せられて顧みられざりき。されば、親子、家庭、夫婦の間に於ける圓滿なる愛情の發達の如き、勿論妨げられて、それよりも義理外聞といふものが重んぜられし也。之に就いて、巢林子に逸話あり。或人彼に問うて曰はく、淨瑠璃中、男女の干係を說くや、必

ず先づ女子をして思ひのたけを語らしめ、切なる戀を語らしめ、而して後男子に言ひ寄らしむるを例とせり。女子果して斯くの如く厚顔なりやと。巣林子答へて曰はく、元より斯くの如き女性なし。これ唯女子の胸裡に鬱在せる眞情を吐露せしむるのみと。果然、眞正の愛情は、巣林子の大詩筆によりて描き出されたりと謂ふべし。然も實世間は、悉くお初德兵衛の如くなる能はず、悉くお三茂兵衛の如くなる能はず、又悉くお花半七の如くなる能はず。家庭の中にも、夫婦の間にも道德の高きだけ、それだけ愛なるものは之に反比例して、抑壓せられざるを得ざりき。されば其弊の極まる所や、徒らに形骸を尊び、叨りに成文を重んじ、其精神生命は措いて問はれざるに至りぬ。即ち貞女とは、單に三從七去の敎に絶對に服從し、再醮の如き最も大なる罪惡とおもひ做さるゝに至りぬ。

前項、鄭成功の母の辱められて自裁するや、成功聞いて馳せ歸り、乃ち母の腸を抉出して之を洗ひ淨め、而して後厚く葬りしとぞ。成功の意は諒とせむも、形骸に貴きを置くも餘りに甚しからずや。

故に女子一たび嫁すれば、夫に屈從し、舅姑に屈從

し、若し夫に後るれば即ち未亡人（あゝ何たる慘酷なる名稱ぞ！）として、厭世悲觀して了はるが、貞女一般の徑路なりしが如し。これ封建時代の女子の一生涯にして、之を貫くものは、即ち貞女道の婦人を以ッて賞せられし也。佐藤繼信、忠信の妻、さては千手の前、辨の內侍、利休の女も皆然りし也。

然るに何といふ矛盾ぞや。『貞女兩夫に見えず』といふ道德の下より、身は汚すとも操は破らずとて、夫の爲、親の爲、貧より起る身のつまり、艱苦界に投じて、貞女と呼ばるゝ奇異なる現象を生ずるに至りぬ。此思想の上より觀れば、母の爲に盛遠に從ひし袈裟（長門本平家物語、盛衰記に據る。）母の爲、子の爲に清盛に從ひし常盤は正に貞女に相違なき也。殊に可笑しきは横濱岩龜樓の遊女喜遊の態度なり。彼女は「降るあめりか」人に袖を濡らさゞりしとて、賞讚せらるゝ也。これは貞女道を立つるでもなければ、又身は汚すとも操は破らずといふたぐひでもなく、全く當時沸騰したる一種の攘夷思想を體現したるに過ぎざるのみ。

ただ貞女道の取るべきは、其精神に在り。犧牲の精神、服從（善き意義に於いての）の精神に在りとす。己を顧みずして他の爲にする精神に在りとす。されど貞女道に屬する形式は捨てざるべからざるもの頗る多し。殊に單に再醮を肯んせざるを以つて、貞女の標準とするが如きは、極めて低級の道德思想にあらずや。これ男子の嫉妬より來りし女權の枉屈に過ぎずして、貞操其者とは毫も交渉する所なき也。そは此狹義に於ける貞操を責むること、女子に酷にして、男子に寛なるを以つても知らるべきにあらずや。

狂言「箕被ぎ」に、亭主連歌に耽りて家業を顧みざるより漸く身代破滅とならむとするを、女房憂ひて苦諫を呈し、却つて亭主の不興を受け、「それぢや暇を遣るから出て行け」といはる。女房答へて、「それならば今日まで貴郎の爲、代なしゝ、嫁入道具一切、返してたまへ」といふ。亭主「イヤ今云うたことは皆戯言。とかく夫婦は何事も同意せねばならぬ」と閉口しながら拒む。女房重ねて「暇を下され」といふ。亭主「よし此上は出て行きたくば行かしませ。さりながら貞女兩夫に見えずと云うて、一度結んで二度改むる道は無いこと、三從の愼みを知らぬ女は、神祇釋敎にも皆背くぞ。和御料は生類ではあるまいぞ」と、飽くまでも去るべき女房の將來の身のふりかたまで、斯く嫉み耻ぢしめて、其自由を拘束せむとする男子の勝手と暴

狀を見る也。

然も斯かる不條理の壓抑が、男子には勿論、女子自身にも認められつゝあるは、從來貞女道の書が悉く男子の手に成りて、男子が種々自己に都合好きことばかりを巧みて、組み立てたるものなれば也。例へば有名なる『姬鑑』は中村惕齋之を著はし、『和俗童子訓』は貝原益軒、『女大學』は著者不明なりと雖も貝原派の人、『今川狀』は今川了俊、『本朝烈女傳』『本朝女鑑』は淺井了意、『唐錦』は大高坂芝山、數へ來たれば、古來貞女道の經典を作りし人は總て是れ男子にてある也。而して余は未だ貞女道最古の經典たる貞水式目編纂に女子が加はり居りしとは聞かざる所とす。

而して是等多くの男子は所謂漢學者若しくは僧徒にして、或は三從七去の純然たる支那道德を其儘輸入飜譯し、或は「女子は汚れたるものなり」「女人は罪障深きものなり」「女は三界に家なし」と說く佛の敎理を混へたるものならずんばあらざりき。稀に野中婉女の『朧夜の月』の如き、女性の手に成れるものなりきと雖も、

既に貞女道に養はれたる婦人の考案より出でしものなれば、女子の爲に氣焔を吐き、枉屈を訴へたるはあらず。偶々幕末稍女子教育盛んになりて、所謂女博士の輩出せしことありと雖も、悲しい哉、未だ女子自覺の一歩をだに取る能はざりし也。斯くて從來の女子は、すべて男子の爲に注文せられて、誂向に製造せられたる自動器械として使用せられしに過ぎざるのみ。余は女子に對する道徳律の、殊更に制定せらるべき必要を見ざれども、

近時中島徳藏君、「明治女大學」を著はして、中等程度の女學校に用ゐしめむとす。余未だ見ず。故に今評に及ばず。

今後女子に關する道徳書は、女子自身が成さむことを望まざるを得ず。而して次第に女子が自覺の域に進み、自己の枉屈を伸べ、正當なる權利と自由を攫得するに到らむことを冀ふもの也。

餘論―貞女道と生活困難と。

余は此文の初に於いて、貞女道と武士道とは全く發達の經路を同うしたることを述べたり。而して未だ貞

女道が專ら武家に屬する道徳にして、町家のたやすく準據する所ならざりしことを論ずるを遺忘したり。蓋し貞女は兩夫に見えずといふも、實は世襲財産の座して受けらるゝ境遇に在りしものゝ言なりしを想はざるべからず。一般下層の町民が極めて少數者を除くの外、いかで斯くの如き太平樂を謳ひ居らるべかりしや。さればこそ身は鬻ぐとも操は賣らずなどゝの、貧者の爲に作られし福音も出で來しなれ。讀者よ、間十次郎の妻、及び彼の妹は、何が故に夜鷹とまで成りさがりしぞ。彼は武士道の唱首山鹿甚五左衛門の遺鉢を傳へたりと稱せらるゝ大石良雄の擧に與みしたる武士の片はしにてはあらざりしか。嗚呼武士道とは、單に二君に仕へざるの謂なるか。貞女道も、誤れる武士道の前には、更に蹂みにじられて顧みられざりし也。否々刻下の生活難といふ緊急の事情の爲には、貞操も賣られ、人權も買はれし也。巣林子さへも『長町女腹切』に、「世間に多い心中も、銀と不孝に名を流し、戀で死ぬるは一人もない」と、戀愛の極致なる相對死も、金力

の爲には屢々動かさるゝ所あるをなげきしにあらずや
嗚呼貞女道は、之よりも更に難い哉。

附――地方女學の二大恐慌

其一　高知女學校事件

余の前號に掲げし『女子の威嚴に就いて』の文を草し了はりし頃、高知市某私立女學校、及び縣立師範女子部の兩寄宿舍に、二人の青年（共に十七年。）忍び入りて、寢臥せる女學生を脅迫し（前者にては芝居に用ゐる僞刀）後者にては眞劍にて）、而して前者にては三少女を凌辱し、後者にては一女生徒（吉川年子といふ。年二十二。）の爲に、却つて取押へられたる椿事（二月七、八日夜）傳へられぬ、あゝ何たる野蠻の所爲ぞや。余は曩に斯かる場合に取らるべき手段の、今日甚だ温和巧妙に進歩したることを想像して、切に女子の威嚴の必要を說きしものなるが、然も斯くまでに古の蠻風を殘しけむとは、今更に驚かされて、坐ろに余が言の忌々しかりしを悔いざるを得ず。これ決して他地方に於いてあるべきことゝはおもはれざる也。土佐殺伐の氣風の特有なるものが、

偶々二青年によりてあらはれしにあらざるか。斯く言はゞ土佐人は、たゞ二青年の特に有したる性質に因るといはむかなれども、余は然るまじとこそ思へ。斯かる罪過は社會周圍の干係に負ふ所多ければ也。

其二　岡山女學校事件

これは岡山市私立山陽女學校に於いて、松岡千代子といふ年十六なる二年級の一生徒が、亞砒酸を仰いで自殺を遂げたる（二月六日朝）出來事なり。（讀者既知の事件なれば詳しくは記さず。）それが爲に岡山市の各種女學校にては、時ならぬ恐慌を來たし、俄に生徒に向ひて、哲學雜誌の購讀を禁じたりとさへ傳へらる。（哲學雜誌といふもをかし。多分哲學がゝりたる雜誌の謂なるべし。）何と滑稽の沙汰にはあらずや。これ教育者が自家の無能と教育の無効とをさらけ出したるものにはあらずや。また世間にては、山陽女學校が從來基督教主義を標榜せりしを云々して、宗教教育の危險を唱ふるものあるやうなれども、是れ亦大早計の觀察なるべし。抑々松岡千代子は、何が故に自殺を謀るに

至りしかといふに、之は主として幼時の境遇に因りしもの也とす。尤も時代の暗流の彼女を死に誘ふものありしは、確かなりと雖も、そは最近に起りし偶然の動機にして、眞原因は彼に在りて此に在らず。こは彼女の十六年間の生立、即ち三歳母に別れ、六歳父に後れ稍長じて常に繼母（實は伯母）の不品行に耻ぢ、友なく親しき者なく淋しかりし境遇を考へやれば、おのづから解け易かるべき、すぢみちなり。斯くの如き少女を感化せむには、尚未だ數年の宗教教育を必要とせりし也。余は之を余が十年の教育經驗に徵して敢て言ふ。

（第一頁より續く）いづれにせよ、少年の美は自然天然の美で中年晩年の美は活動の美、修養の美である。

今の身の第一の自然の花は風に破れた。何人も之を補綴して元の花にする事は出來ぬ。然し御身の第二の花は、直ちに其の破れた跡に萌みはじめて居るではないか。活動の花、修養の花は、是より漸く其形を成さんとして居るではないか。

人生は長し、世の中は廣し。まあ〳〵徐ろに流れに從つて行きたまへ。山盡きて又山を見る、路窮して又路を生ず。十年十五年の後、乃至は二十年三十年の後、どんな自然の美を現ずるか、どんな白髮の花を開くか。篤く考へて見ると、お互ひ實に樂みが深いぢやないか。さようなら！

村子さま　　利彦

鳩と社會主義者

（月刊スケッチより轉載）

堺利彦

一月の末、横須賀の社會主義演說に行つた歸り途、木下尙江、原霞外、西川光次郎等の諸君と共に、鎌倉八幡宮に參詣した。

公曉の隱れたりといふ銀杏の樹が果して七百年前の物であらうかの、靜御前が「入りにし人の跡ぞ戀しき」と舞つたは何處であらうかのと、型の如き問答をしながら石段を登つて、暫く正殿の門の脇に可愛らしき鳩が、パサ〳〵パサ〳〵と四方から寄つて來る。すぐ側にあつた粟の一錢皿を二つ三つ撒いてやると、幾十の鳩が重なりあふ樣にコツ〳〵コツ〳〵とやる。豆だといふと直ぐに拾てしまふが、粟の小粒は容易に食ひ盡されぬ。

夫でも段々に粟が少くなると、鳩は殘りの粒を尋ねて我々の靴の間にまでやつて來る。ジツとして立つて居ると、足のまはりに四五疋も來て居る。何だか非常に嬉しい心地がする。西川君などは蹲んで鳩をつかまへたりして居る。それでも大して怖がりもせぬ。

予はフト思ひついて、又粟の一皿を取つて、靴と足のまはりに振り撒いた。鳩は予の足を中心にして、爭うて群れて來る。幾十か幾百か知らぬが、予の靴の上に盛りあがる樣になつて居る。予は身動きもせずに立つて居る。何だか非常に嬉しい心地がする。

「ヤツこりや面白い」と原君が云ふので、何か知らんと振向いて見るに、原君の肩に鳩が一羽とまつて居る。見て居る中にパサ〳〵と又一羽今度は原君の帽子に止まつた。是は面白いと云ふので西川君と予とは更に粟の一皿を取つて、鍔廣の中折帽子の上にザラ〳〵と撒きちらした。サア鳩が來るとも〳〵、二羽、三羽、五羽、七羽、頭の上に群がつて居る。折々鍔を踏みはづしては肩の上に滑りおちる。滑りおちては又飛びあがる。何だか知らぬが予は實に嬉しい心地がした。

木下君は村の小供の二三人と共に、少し離れた處から、ニコ〳〵として眺めて居た。

聖書と婦人の權利

山口孤劍

（一）時代の產物のみ

輕薄なるキリスト敎の僧侶は常に曰く、儒敎は女子と小人は養ひ難しと罵り、佛敎は外面如菩薩內心如夜叉と喝破す、獨りキリスト敎のみ神の寵女として之れを待つ、キリスト敎は婦人の親友なりと。あらず。聖書亦婦人の權利を認めず、他の宗敎と均しく『人』なる婦人の自由と獨立と光榮と威嚴を侮辱したる事實一にして足らず、キリスト敎は決して婦人の味方に非ざる也、思へ時代は人を作る、哲人も聖僧も義人も豫言者も『時間』の巨木に生れたる果實のみ、遂に時代の怒濤を脫すること難し、アブラハムも、モーゼも、ダビデも、キリストも時代の子たるを免る能はず、然り其の時代の子の手に成りし聖書も亦時代の產物のみ、二十世紀の自由批評の炬火の前に完全無瑕てふ聖書も其の矛盾と迷謬の醜影を掩蔽する能はさる怪しむに足らざる也、

（二）婦人は家畜と同一也

掠奪結婚、賣買結婚が東西の古代史を彩色したることは普く人の知る所也、聖書亦此の事實を記載して憚らず、アブラハム其の子イサクの爲めに妻を娶らしむべく從僕をナヲルに遣して遣女を掠奪せしめしに非ずやタビデがアブリガルを娶りたるも亦强奪結婚に非りしか、ダビデの使者に逢ひてアブリガルは『婢は我か主（夫）の僕たちの足を洗ふ仕女』なりと地に伏して感泣したりしを見ずや、アブラハムは其の妻サライをパロ王の侍妾にすゝめて牛、犢、駱駝を報酬として獲得せしに非ずや、偕老を契りたる終生の愛人を獸類と交換す、之れ實にバイブルの人類に敎ゆべき道德書として價値ある理由なる乎、婦人を以て獸類と同一視せし醜劣汚辱なる事實は出埃及紀二十一章十七節に在り

汝隣人の家を貪ること勿れ、又隣人の妻及び婢、僕、牛、驢馬、並に隣人の所有を貪ること勿れ

あゝ何等の醜惡ぞや、撰民と云ふこと勿れ、野蠻蒙昧

なる古代の感情はエホバの偏愛せしイスラエル民族をも支配せり、婦人は「人」に非ずして一個の鍋釜、一の驢馬、綿羊と異らざりし也、聖書を讀んで「ゼウスの妻」「ダビデの母」「モノアの妻」「サムソンの母」の語に接するに毎に婦人は自己の名すら有せずして、僅に父や夫や子の名に附着して喚ばれつゝありしを思ひ、如何に婦人が男子の「所有品」たりしかを憤らざるをえんや、舊約の婦人、賢母良妻乎、我知らず、自己の名すら有せざる婦人は與作の馬、權兵衛の牛といふと些の異る所を知らざる也、創世紀十九章に現はれたるロト其の二人の娘と姦する如き、其の三十四章の皇子シケムがレアの娘を路に擁して之れを姦したる如き醜怪なる事實數ふるにいとまあらず、申命記には、

人妻を取りて之れを娶れる後、恥つべき所の之れにあるを見て之れを好まずなりたれば離縁狀を書いて家より出すべし。

といふを見れば、他人の妻をも掠奪することは決して罪惡にあらざりしもの丶如し、見よダビデ、ソロモン、

サムソンの如き曠世の名君英傑も、幾十の侍妾を置て荒淫漁色飽くことを知らざりき、噫婦人を情慾の奴隷とする原人の蠻風陋俗を記載する聖書は眞に現代婦人の味方なる乎。

（三）懷妊は罪惡なる乎

懷妊は罪惡也てふ觀念は創世記のエデンの初語に初まる、アダムとイヴが神の禁せし果實を味いしが爲め、懷妊の苦痛を罪惡として課せられたりてふことは、食慾と色慾の欲求衝動を否定するものにして、人類の「繁榮」と「存續」と「擴張」を咒咀する宗教上の一大迷信也而して此の人類の「萎縮」と「減少」と「滅亡」を鼓吹する文字は聖書の到る處に隱見す、例へば詩篇五十一章十七節を見よ

視よ我れ邪曲の中に產れ、我母罪によりて我を孕みたりき

斯の如く「懷妊即罪惡」の觀念は女子を以て醜惡なる一動物として遂に男子に伍せしめず、利未記の語る所に依れば、イスラエルの女子男を生まば七日、女を生

まば十四日汚れたるものとし、男を產みて三十三日、女を產みて六十六日を經過せざれば聖物に觸るゝ能はず、エルサレムの聖殿に詣づる能はずといふ、キリストは「女を見て色情を起す者は其人已に姦淫を犯せる也」と叫び、パウロは「男は女に近づかざるを善とす」と叫びて、婦人を以て觸るべからざる、見るべからざる毒鬼惡魔の類となし「罪を起すに非ずと雖も斯の如きは身に艱苦を受けん」てふ句は肉體醜惡說を產み、「婚姻せざる者にありては如何にして主を悅はしむべきかと思ひわづらふ」てふ語は獨身獎勵說を產み、かくして終身孤棲獨居して讃美禮拜する加特力の尼僧は生れし也、然れども激して逆しる者は野性の衝動也、壓して抗する者は本能の悲鳴也、常に佛蘭西の小說物語に見る處の紅頰光あせざる加特力の尼が敎戒を守るに堪えず、寺院を脫れて情人と夕霧ふかき湖水のしづくと化する如き詐僞壓制なるキリスト敎道德の犧牲となりしものならずや。

「更生するにあらざれば救濟されず」てふ聖書の句は

東西を辨せざる生兒にすら原罪を宣告して、洗禮を受けずんば敎會員となるを許さず、英國基督敎會の如きは其の神學書にも祈禱書にも「婦人が子を生むとの罪惡を主の名によりて淸められん」と臆面もなく記載せりき、思ふにキリストの誕生の如、聖靈之れに宿り玉いしといふもの、畢竟するにマリアてふ「罪多き婦人」の母たるべく大救世主の威嚴を損害するを恐れしが爲めに非ずや、さればにや、聖書何れの所にもキリストをヨセフの子といひ、ダビデの後裔といふも遂にマリアの子と喚ばず、此の一事以て婦人を賤卑し懷姙を罪惡とせることを證明し得べき也。

(四)聖書に模範的婦人ありや

聖書に模範とすべき婦人ありや、聖書に龜鑑とすべき女子ありや白髮半ば生じたるを愧ぢて窈窕嬋娟なるハガルを妾にすゝめて夫アブラハムの野性に媚びたる老妻サライは良妻の標本なる乎、彼女の如きは今日の貴族富豪の妻にも其の模型を求め得べき也、眉ひそみたれど豐頰紅臉尙ほ捨つべからざる寡婦ルツをして富み

て老いたるロザに嫁せしめたる姑ナヲミは賢母の龜鑑なる乎彼女の如き養女を藝妓に賣りて左團扇の榮華をたのしまんとする市井の老婆と隔庭を見ざる也、『汝をはなれて歸ることを我に促すこと勿れ、汝の行く所に行き、汝の宿る所に宿らん、汝の死ぬる所に我も行きて葬られん』といふルツは聖書中最高なる人格を有する現想的婦人なりといふ、嗚呼基督敎の理想的婦人は自己の獨立と自由と光榮と威嚴を認めざるも可也、たゞ盲人の如く從順に、唖者の如く沈默すれば即ち足る彼の臺所にありて晩餐を料理する姉のマルタを賤しめて、沈默して法話を聞くマリアを賞讃せし基督敎は、家事を厭ひ勞働を忌む歐米の貴族富豪の妻女に好餌を與へて、パンの燒き方、スープの製法をも知らずして、徒らに敎會詣に貴重なる時間を誅殺するに至らしめぬ孔雀の尾の如き長裳を曳き、濃紅深綠の花冠を戴き、寶石の胸飾をなし、金剛石の指環をはめて、思ふさま着飾りながらあたゝかきストーブのかげに哀しき聲して祈禱する貴美人を擁護する者は此のマルタを賤みマ

リアを賞讃する聲なりとす、言ふ勿れドルカスは死する迄貧者の爲めに衣を縫へり之れ理想的の婦人ならずやと、男子の横暴忍ぶべし、女子の天職は只衣を縫ふことのみなりと云ふ乎。

（五）男子の聖書のみ

パウロが男子なくば婦人なし夫は妻の主にして妻を司るものなりてふ語は、夫は天にして妻は地なりてふ頑迷なる東洋思想と異ることなし、基督敎の聖書は飽くまで婦人を男子の從屬とし奴隸とし家畜とし所有品として其の自由と獨立を無視して憚らず、アブラハムの信仰、ヨブの忍耐、モーゼの謙遜、サムソンの勇力、ソロモンの智慧、ダビデの德義はあり、男子の偉蹟は數ふるに暇あらざるに婦人の事業は一もあるなし、たゞ聖書には婦人の妻たり母たり妾たり賣淫婦たる事を記載せるのみ、聖書は男子の聖書のみ、決して婦人の聖書に非る也。

春日郊行の記

堺利彦

◎小學校で『春日郊行の記』といふ作文の題を出されて、『予一日一瓢を携へ』『此日天氣清朗』『遊意勃然として禁ず可らず』『暮色蒼然として遠きより至る』などゝ云ふお極り文句を並べて、十二三の少年が一廉の文人氣取になつて居た事は、思へば既に廿五年の昔である。

◎前號の豫告にフト此題を出したのは、何かの序に昔を思ひ出だして頻りに懷かしい氣がしたので、實は『天氣清朗』の日を撰んで、一瓢は携へずとも、一日ユルリと郊外に散歩して、其の實景を寫したいと思うて居たのである。

◎然るに、別項『由分社より』に記した如く、急に色々と忙がしい事が起つて來たので、遂に止むを得ず、想像の、夢の樣な記行文を書く事になつた。

◎午前十時頃、予はブラリと予の家を出た。人通りの多い中を、電車が行く、荷車が行く、騎馬の軍人が行く、あゝ町中は是が厭だと思ふ中、いつの間にやら予の身は東京の郊外に運び出されて居る。あゝ好い景氣だ。こゝから見ると、澁谷から目黑にかけて、一面の森や丘や田や畑や、ほんに氣が晴々する。此邊の地理を餘り善く知らぬので、どこをどう行つて善いか知らぬが、別に目的のある散歩ぢやなし、マア此道を行つて見よう。オヤこゝは大ぶん急な坂になつて居る。何だか暗い陰氣な處だ。片側は竹籔で、片側は椿の森だ。然しこんな處を獨り歩くのも中々味なものだ。

◎坂の下の方から子守の娘が三四人やつて來る。椿の花を糸に貫いて、手ん手んに提げて居る。脊中の兒に持たせたのもある。負はれた兒も、負うた子も、同じ樣に鼻の下に二本棒を有して居る。其の二本棒の生々しいのもあれば、干からびたのもある。善く見ると中々顏立のいゝ子もある。今に是が鄙に稀なる美人と云ふ樣な事になるのであらう、などゝチヨイと考へる。

◎今度は長い〳〵竹の大把を脊負はされた馬が來る。竹の穗先はジヤリ〳〵ジヤリ〳〵と地に引きずつて居

る。馬は小石を踏みすべらし、踏みすべらしながら坂を登る。其の爪先に力を入れる有樣が如何にも氣の毒に思はれたので、擦れちがひ樣に馬の顏を善く見ると、片方の目は白くなつて居る。そして艶のない、赤ッちやけた立髮が、もつれあつて瘦せた首に掛かつて居る。肋の邊は見えなんだが、嘸とばかりに思ひやられた。馬方は平氣なもので、綱を輪にしてピシャリと一つ喰はせた。馬はドダ〳〵と又小石を踏みにじりながら登つて行つた。

◎坂を下るとそこに小川があつて土橋が架つて居る。こゝは一面に善く日がさして居る。橋の脇には物洗場があつて、卷手拭の女が二人、太い太い足を見せて何か洗つて居る。一人は子を負つた年增で、何か頻りに喋りながら菜を洗つて居る。一人はチョット色の白い嫁さん姿で、赤い襷に趣きを示して居る。是は芹を洗つて居る。芹の白い、長い、美しい根が、どこやら又此の嫁さんの愛らしい所に釣合つて居る樣にも思はれた。お喋りの年增が大口を開いてハハハ、、と笑つた

時、嫁さんの唇もチョッと解けて、黑々と染めた齒がチラリと見えた。

◎予が此の景色に見とれて居る中、リリリン〳〵と物騷がしく耳元にベルが響く。びつくりして振返ると例の自轉車。鳥打帽に半ズボンは申すも愚か、焦茶色の毛のシャツを上衣にして、卷煙草なんど吹かして居る。小面憎げに女達も見て居ると、ハイカラ殿は坂を下つた惰力を利用して、腕組の脇見といふ大得意の輕業をやつて行く。あれで眞逆樣に落ちて吳れると見ものだが、などゝ惡い事を考へる。

◎それから少し行くと、見わたす限り一面の五行田で、古い形容だが、紫の茵を敷きつめた樣である。予の父の俳句に『五行田の只だ眞中に座りけり』といふのがあつたが、それをフト思ひ出して、親爺もあれでチョット風流氣があつたのだな、などゝ考へると、何だか此の俳句を自分で實行して見たくなつた。そこで田の中にはいつて、五行の最も繁く咲いて居る處を撰んで、何となく只だ眞中に座つて見た。折しも往來を通りか

ゝつた商人體の男が、不思議そうにジロ〱と此方を見て行く。風流人のする事を俗物が怪むのは當り前だと、少々得意になる。然し如何に風流人でも、餘りに所作爲が無いので、こんな時には喫烟者が羨ましくなる。せめて茲で一句やるべき處だが、親爺はどの修業のない身は、それも思ふに任せず、何とかの何とかしたる五行かな、などゝ何とか盡しで調を作りながら、頻りに想を誘うて見るがサツパリ出ぬ。

◎エヽと舌打一つして立上り、今度は向ふの丘の日當りの善い芝山の上に、少しばかりの小松原があつて、其間に只つた一本だけ大木の松が腕を廣げて立つて居るのを見て、其の景色に引きつけられて、道も無い處を登つて行つた。一本松の下に踞して、眼中の風物を我一人で領した樣な氣になつて、暫く爽快の感に打たれて居たが、爽快の感は一變して喉がかはく〱と云ふ感となつた。即ち水が飲みたいと云ふ感となつた。せめて密柑でもあつたらなアと思つた。イヤ密柑ばかりぢやない、海苔巻の鮨でも重箱に詰めて、ビールの空壜

に茶でも入れて、家内中打連れて遊びに來たら、どんなに愉快な事だらう。イヤ「だらう」どころの話ぢやない。昔ほんとに此處に來て、愉快に遊んだ事があるぢやないか。家内三四人、友人二三人、子供と辨當とを乳母車に乘せて來て、此の眺望の善い處で、毛氈の上に團居を作つて、樂しく半日を過した事を思ひだす。あゝ其時の其子、其母、共に此世を去つて居るのだ。運命の推移、境遇の變遷、思へば夢やら現やら、今が昔か、昔が今か、何が何やら只茫々〱。

◎フツと目がさめて見れば、ツイうと〱とやつて居たのだ。鶯は直ぐ側の小松に來てホーホケキヨウを歌ひすまして居る。喉には頻りに渇を覺えるが、鶯の居る間はどうも起きあがる譯に行かぬ。ジツとして三遍ほどホーホケキヨウを聞いた時、覺えずも大欠を一ツ漏したので、鶯はピヨン〱〱と彼方の松の茂みに隠れた。

◎それから漸つと起きあがつて、目黒停車場の方に足を向けると、又一つ予の目を引いた景色がある。二人

連の紫色袴が恰好よく床几を陣取つて、一心に畫版に向つて居る。向ふの丘の上の、杉か檜かの木立が、さも面白く見えて居るので、多分それを寫して居るのであらう。餘り近く立寄るも如何と遠慮して、少し離れた後の方から、此のハイカラの婦人畫家をも景色に加へて、更に向ふの丘の木立を見やるに、何だか斯う水彩畫を見て居る樣な心地がした。

◎それから喉の渇きに促がされて停車塲に行く道に出た。處が、予の前に是も二人連の婦人がノロ〳〵と歩いて行く。道が狹いのを、無作法に追越す譯にも行かず、據んどころなく跡からブラ〳〵從いて行く。見るともなしに二人の姿を見るに、考へる迄もなく嫁と姑、而も其の姑のサモ姑然たること、其の嫁さんのサモ嫁さん然たること、實におかしい程である。姑は白髪まぢりの小さい小さい丸髷で、殊勝らしく被布の樣なものを着て居る。體格は甚だ頑丈で、足踏も中々確かである。竊かに其の横顏を窺ふに、一つ笑へば三文の損があるとでも云ひそうに、堅く口を結んで居る。但

し此人、珠數は手より放さぬと云ふ質らしい。謹んで按ずるに、後生を願ふ婆さんに限つて、兎かく我欲我慢の強いものである。扨嫁さんの方は如何にと見るに、水も垂れよと大丸髷に結ひあげて、赤い手がらに鼈甲の中ざしを五分ばかりづゝ出してあるが、御痛はしや少々癖のある薄い毛が、あちらこちら口をあけて、簾越の樣に頭の生地が透きとほつて居る。それでも頬から襟まで眞白に塗りたてゝ、規則正しき三本足を拔衣紋の上に見せて、脊中一面には幅の廣い丸帶を脊負つて居る。あゝ此の徳川以來の古い景色が、紫色袴の婦人畫家と相並んで存在して居るかと思へば、予は實に情なくなつた。然しながら予は考へた。是もモウ永い事はあるまい。道の狹い處では、後からズン〳〵行つて突倒して追越すといふ譯には行かぬ。予はジツと辛抱して二人の跡に從ひながら、とう〳〵停車塲の前まで來て、やつとの事で喉を濕した。

余は寧ろハイカラ女學生を取る

目黒里人

（一）

世間が女學生を輕蔑するのも久しいものであるけれど、近頃に至つては又一種反動的の氣勢が見へる樣になつて來て、曾ては昔氣質の老人連がとかく當世風の女學生を嫌惡したといふに過ぎなかつたのが、近頃では立派な明治ッ子までが、之に雷同して石を投げつける、そればかりでない、新聞紙では當の相方と獨斷されて居る大學生などが、生意氣に通人めかして、女學生は野暮だなど〻仰ある、里人の友人で帝國大學の文科に居る男の話によると、高等學校から大學を通じて連りに鏡花熱が流行して、何でも藝妓といへば鏡花の作物に現はれて來る樣な肌の女ばかりだと妄想して、女學生と見れば盛に冷嘲惡罵するといふ風が流行するそうで、此一般の氣風を代表して現はれたのが、則ち登張竹風とか、大町桂月とかいふ人で、四谷の大番町や牛込の神樂坂で得た經驗を以て堂々と日本婦人を妄評するといふ先生であるのだ、但しこれは妙に鏡花が其小說の主人公に角帽や學士を以てしたのが大なる影響を及ぼしたのだそうである、けれども之は抑も末の末で、自分を以て見ると之は女子教育が盛んに鼓吹されて、女學校と稱するものが濫設された結果、女學生間に多少面白からざる事實が生じたので、教育熱の流行に對する大反動が起つて來たからである、此反動に乘じて大多數の野治馬連が盲目的に雷同して來たのだ近頃に至つては隨分慘酷な迫害と凌辱とが公行されて來た、茲に於てか、里人及ばすながら蹶起して天下の女學生諸君の爲に絕叫せざるを得ないのである。諸君、余は寧ろ思ひ切つたハイカラ女學生諸君に伍するものである。

（二）

里人が此頃或る停車場で下車しようとすると、そこへ五六人の大工の徒弟とも見へる連中がやつて來た、處が其クラスの中に二人の女學生が居た、すると彼等

はゾロ〳〵と其戶口に來て其戶を開けて入ろうとする彼等はこんな事をいふて居る「ヤ女學生が居る、ハイカラが居る」「二百三高地だ」「此處へ入ろうヂヤアないか」恁んな事を云ひ乍らドヤ〳〵其部屋に入つて來た、諸君、自分は電車の中、汽車の中で、頻りに此の如き事實に遭遇する、けれども無邪氣な、寧ろ天眞爛熳な勞働者の連中までが此の如く女學生に對しで暴言を吐きかけるといふ樣な事は、極めて近頃の事である、天下の女子教育者諸君、之は由々しき大問題ではないか、諸君の掌中に教育しつゝある女學生諸君は其通學の途に於て、其旅行の途に於て、無教育者、勞働者、凱旋軍人の一團から常に聽くに忍びざる暴言を吐きかけられて居る、自分の記憶によつて見ても、之まで海老茶の袴を胸高につけて、薔薇の釵の香高く、楚々として街上に蓮步をうつした女學生に對して、白晝公然、勞働者が戲口を云ひかけるといふ樣な事は決して無かつた、それは慥かに女學生といふものが教育あり、品格ある處女として認められて居たからであるのだ、けれ

ども近來、殘忍極まる輕業的新聞記者から隨分無責任な中傷をうけて、針程の事實を棒程に云ひふらされたので、もう女學生とへいば、公園の共同椅子で密會をするもの、通學の途で艶書の往復をするものと思ひ做されて仕舞ふ、そこで何にも知らない無邪氣な勞働者の連中は女學生を以て伍し易き、近き易きものに思ふて、近頃こんな恐ろしい風が行はれて來たのである、それは數多い女學校の中だもの、幾萬の學生の中に十人や二十人の不品行な學生はあるだろう、それが爲に何にも知らない無關係な社會にまで女學生を以て賣淫婦か茶屋女と同じ樣に思はしめるに至つた、無責任なる新聞記者の罪は、實に惡みても餘りあるものである吾人は幾多の純潔なる女學生諸君が輕佻なる社會からして此の如き凌辱をうけつゝあるのを見て、實に憤慨に堪へないのである、諸君、只此上は大膽なれ「道理」の存在する處、諸君 茨を分けても進み給へ、諸君が教育を授けられ、諸君が覺醒して行く事は「合理」の事ではないか、余は寧ろ思ひ切つたるハイカラを取る

のである。

(三)

女學生を憎惡する風潮と共に、女子教育をも排斥せんとする惡傾向が生じて來た、女子が教育をうけた爲に實際社會に處して隨分衝突も起るだろう、弊害も生ずるだろう、けれども其弊害は少しも女子教育を否認する理由にはならない、弊害を両方で列擧して爭論するほど愚な事はない、けれども女子教育はどこまでも合理的の事である、よし之が爲にどんな衝突が生じようとも、弊害が起ろうとも、女子教育はどこまでも進行させなければならない。

吾人は之まで隨分所謂ハイカラ女學生に對する批難の聲を耳にした、けれども何が故にハイカラが惡いのか其理由を聞き得なかつた、そこで我輩はハイカラ女學生を取るといふ標題を掲げた上は、何が故にハイカラ女學生が好いかといふ理由を陳述しようと思ふ。古來女子の性格に隨分偏狹な點があつて、猜疑とか、嫉妬とかいふ性情は殆ど女子固有の惡德であるかの如く

思惟された、けれども猜疑よりも嫉妬よりも更に恐ろしいものは女子の虛榮心である、此虛榮心が如何に世界幾多の男子を墮落と犯罪の淵に誘ふたか今更いふを待たぬ處である、けれども之等殆ど女子の遺傳的痼疾となつた惡性を最もよく陶冶し得るものは教育である

苟も鏡花君の夢的小說を除いては他に實際社會に於て無教育な女性の間に決してあんな女があり得べきものでない、それをあると思ふのは竹風君か桂月君より外にない、無教育な女に何をいふて聞かしても全く無駄である、矢張り教育が始である、僕は江戸ッ子でなくても好い、意氣地がなくつても好い、野暮でも好い、僕は大にハイカラ女學生に同情するものである。

(四)

どこまでも從順で、理が非でも夫の奴隷に甘んじて居るといふ女性、則ち日本古來の理想的女性は或は貴族や富豪や其他怠惰なる現今の上流社會の妻としては適當であるかも知れぬ、鏡花式、銀月式のデッカ肌の女も、遊んで居て飯の食はれる階級が、慰み半分に妻

として置くのには適當であるかも知れない、けれども自分と一處に貧苦を忍んで、自分と一處に社會に仕事をしてもらふには、果敢ない女の虚榮心といふ樣なものはスッカリ捨てゝもらひ度い、それには矢張智識が必要であるのだ、敎育が必要であるのだ、夫の事業は恁ふいふものである、夫の地位は恁ふである、人生といふものは恁うであるといふ事を、最も早く了解して與れるものは敎育ある女性である、同じ女でも江戸ッ子式などは實際に於て殊に駄目である、余は此點に於て寧ろハイカラを取るのである。

（五）

男子の卑屈を罵倒したり、婦人解放論を稱へたりするハイカラ式部は、男子の眼から見て、あんまり快く思はれないのも自然ではあろうけれど、それはまだ人道といふものに慣れて居ない人のいふ事である、僕は戀愛の權威の下に、あらゆる社會の秩序と組織と制裁とを無視したる元祿娘の八百屋お七と、今日熱心に婦人解放論を唱へる式部とを比較して、其根本の情熱が

全く同一なことを認るのである。昔の八百屋お七が今日のハイカラ式部だ、只時代の衣が其色彩を加へたばかりである、今日のハイカラ式部の胸底に潜んで居る情熱を、夫の事業を助ける事に向けてもらへば、そこで立派な活動が出來る、ハイカラ主義を持する樣な女性でなければ、また夫の事業を獻身的に助けてもらふ事は出來ない。

吾人の眼には、今日の女學生の一派に形式的だけハイカラ主義をとつて、家庭の强迫に遇ふて保守主義とハイカラ主義とを調和して居るのが、アリ／＼と見へる、此調和が惡い、自分は此不自然なる拆衷的ハイカラ主義を排斥するのである。

諸君、ハイカラたれ、思ひ切つてハイカラたれ、自分は痛快なるハイカラ主義に贊成するのである。（了）

色の配合を主とする西洋流の活花は、無邪氣で厭味が無い。形の變化を主とする日本流の活花は、拵へ過ぎて俗に流れる。

（小原雲年の一節）

我等の胃袋

上司小劍譯

家庭雜誌の材料を何か一つよこしてくれ、十九日までに。といふ葉がきが堺兄から來たので、宛も机の上にあつた、佛蘭西の少年雜誌の、『胃袋の話』の面白いトコロを摘譯し、それに今年のアルマナコの『我等の胃袋』といふ記事を加味して、こんなものを拵へあげた。

若しも人間の胃袋の容積と、消化力とに限りが無かつたら、世界中の可味いものは、皆金持ちの口へ入つて仕舞つて貧乏人は土でも喰つて居なければならぬやうになるであらう。トコロが神樣は至つて公平なもので、人間の胃袋を平等の大きさに拵へたから、幾ら金持ちでも、一度に貧乏人の三倍も四倍もの食物を喰べることは出來ぬ、可味いと不味いとの相違はあるが、人間一度の食量は大抵キマツテゐる、有り餘る金は金庫を拵へて藏つておくし、廣い地面は垣を造つて他人の入

つて來ないやうにするし、多くの道具は、家を取り擴げさへすれば、決して置場所に困らないが、食物ばかりは、モツと喰べたいと思つても、胃袋が一杯になつた上は仕方が無い。百萬圓の金を積んでも、胃袋の建て増しをする大工は雇へない。

若しも人間の胃袋の容積に限りが無かつたら、金持は朝から晩まで、ノベツに何か喰べてゐるであらう。さうして世界中の食物は皆金持ちの手に買ひ占められて、貧乏人は指を咬へて金持ちの頻りに物を喰べるのを見てゐなければなるまい。見てゐるのはよいが腹が空いて〳〵、遂には餓死するであらう。しかし中には慈善心とかに富んだ金持ちもあつて、人の餓死するのを見て居るわけにも行かんといふので、イヤ〳〵ながら、喰べ餘しの食物、——胃の容積と、消化力とに限りが無いから喰べ餘しといふものは無いであらうが、——でもくれるであらう。斯うなると、僅かパンの一缺け、肉の一片れを貧乏人に惠んだ人は、天晴れの大慈善家として、崇められるやうになるのである。食慾に制限

の無い人間に、容積と消化力とに限りの無い胃を有たしたならば、金持ちばかりが肥え太つて、貧乏人は生きながら餓鬼になるのである。考へただけでもゾツとするではないか、怖ろしいではないか。

今の世は、人間に、金持ちと貧乏との階級があつて、なか〳〵平等の幸福を得ることは出來ないが、それでも、胃袋の大きさと、構造とが、ドノ人も大抵一樣に出來てゐるので、貧乏人でも兎に角喰うものを得て、生を絆いで行くことが出來るのである。思へば〳〵、我等は、世界中の人の胃袋を、皆一樣の大きさにして下すつた有り難い神樣に向つて、熱心なる食後の祈りを捧げなければならぬ。

胃袋は食道と腸との中間にある、消化機關の玄關のやうなものであるが、我等は神樣の御恩を忘れて、兎角この玄關を虐使して、動もすると喰べ過ぎをする。即はち大抵の人は、十度の中で、九度まで喰べ過ぎをしてゐるのである。喰べ過ぎると、胃袋を膨脹させ、筋を弛ませ、食物の殘りが停滯して、底には臭いタマリ

水が、出來て、それが毒物になる。

喰べ過ぎ、飲み過ぎは、病氣の原で、多くの病氣は、皆其の原因を胃袋に發するといつてもよい、されば我等は十分に食物の養生をして、神樣から、折角金持ちと貧乏人との別無しに、萬人皆平等に拵へて頂いた胃袋を大事にしておかねばならぬ。胃袋さへ丈夫なら、身體は自然に健康で、心も從て、爽快である。古い諺に、『多くの人は、毎日〳〵、彼れの小刀と肉叉とを以て、（日本人は箸を以つて?）彼れの墓穴を堀りつゝある』といふことがある。我等は決してこの諺の訓戒を忘れてはならぬ。

▲日本製の器物は錠前が弱くていかんといふ事が、或本に書いてあつたので、早速家の用簞笥を調べて見たら、皆んな錠前が壞れて居た。（小飯隨筆の一節）

▲奈良漬を細かくきざんで、水で洗つて、鰹節と醬油とをかけて食ふことゝ、宵越の錢を使はぬ事とが、世の中の最も不經濟な事であるさうな。（同上）

天つ女神の歌

秋水女史

世にもやさしき女の神は
春は胡蝶と身をかへて
花さく野邊に下りたまひ
淋しき里に野に山に
やはらぎの風そよそよと
吹かせ給ひて人の子を
かくも幸ある美はしき
春の野のべにむかふなり。

夏はけがれぬ白百合と
み姿かへてひそやかに
おほひ茂れる夏草の
あたりに立ちて人の子に
清くたふときみさとしを
無言に示したまふなり。

秋は千草におきわたす
露に御身をかへたまひ
かくは下界におはすなり
あはれはかなき蟲さへも
めぐみあまねき白露に
朝な夕なにうるほひて
神の惠みの樂しさを
夜毎夜毎にうたふなり。

冬は降りつむ白雪と
姿をかへてちりの世を
洗はんために下りたまひ
玉のうてなも草の屋も
いづれひとしくけがれなき
しろかねの世となしたまふ。

日本服論

竹内余所次郎

●●●●●●●日本服の好良なる點　一、日本服は寛裕にして着心地よし。二、着ると脱ぐとに手間いらず（但し婦人外出の際は此限に非ず）。三、裁ち方の細やかならぬ爲め仕立直しに便にして經濟的なり。四、座るにも寢るにも究屈ならずして日本家屋に住むに適す。

●●●●●●日本服の惡しき點　一、袂の勞作に妨げある事（但し之は筒袖にて多少防ぎ得べし）。二、脚さばきあしき事（男女とも袴を用ゐて多少防ぎ得べし）。右二條は即ち勞作歩行に不適當なるを示す。三、尋常服は勞作に不便なるが爲め法被、半てん、尻無、腹掛、股引、モムペイ、脚絆等、一種の勞働服を別に要する事。而して勞働階級の外は多く之を用ゐず。四、綿入袷の如き寒時のものにも毛織物を用ゐずして木綿類等を用ゐる爲め屢々洗濯仕立直しを爲すの要ありて時間勞力を費すこと多し。

右は有りふれたる論にして爲めに日本服改良説は屢く唱へられたり。されど僅少なる改良はありしも遂に舊套を脱せず。今茲に

●●●改良説及び其の實行の五六を擧ぐれば、

一、婦人の袴を用ゐるに至りしは著しきもの丶一なり。左れど之とて主として學校敎師、生徒、停車場抔の吏員等に止りて一般婦人殊に其の家居の際には少しも行はれず。

二、婦人の筒袖。之は多少裝飾を工夫して改良しつ丶あれども實行の範圍狹し。其の種類は下田歌子女史の實踐女學校式の半狹袖（元祿式に似たり）、單純なる筒袖、山根式と稱するシヤツ袖の如きもの、袖口を縮め寄せたるもの等に過ぎず。

三、長衣大帶の廢止。婦人が袴を用ゐる際だけは自然の結果として彼の大帶は用ゐられず、長衣も自ら不用なり。隨つて腰部に用ゐる多くの細紐も其の數を減せり。

四、袴を用ゐる婦人には短靴を用ゐる人少からず。

五、同上の婦人は下股引を用ゐる人次第に多し。

六、婦人の帽を戴く者は小兒の外尚ほ極めて少し。

七、男兒の服は全國殆んど筒袖となりたり。

八、男子の洋服採用者年々多くなれり。

此他の改良は目立つ程のものに非ず。

右説く所によつて、男子服は改良さる丶こと少くし

て一足飛びに洋服になるもの多きも、婦人には殆んど洋服行はれずして種々小刀細工的改良の行はれつゝあり又説かれつゝあるを知るべし。婦人の洋服は上流社會（の交際服）と洋行歸りの婦人と極少數の改良卒先家とに依つて用ゐらるゝに過ぎず。

余の説　余も最初は日本服に多少の改良を加ふるの説を抱き、現に明治三十四五年頃には山根正次氏の所謂山根式服を試に製して自分及び妻子一同之を用ゐ居りしも、其の形の優美ならざる點に於ても、其の形式の間の子的にしてハッキリせざる點に於ても、不充分の事少からず、遂に自然に之を廢したり。其の後余がアメリカに渡航して實地に彼の國の風俗を視るに及び其の服制は幾多の歳月を經て工夫に工夫を費し改良に改良を加へたるものなるを知り、遂に全然男女とも洋服採用の説に變じたり。

洋服の中多少の弊所あり。第一、彼の婦人のコルセットの如きは多少斟酌して改善を加ふべきは論を俟たず。第二、男子のウエス（チョッキ）とパンツの重なりを少しく多くして勞作の際腹の冷えざる工夫を要す。第三、ストーブを用ゐざる室に在りては背に厚きものを用ゐるの工夫を要す。第四、婦人の靴の踵の餘りに

小さく高きも不可なり。

余は思ふ日本人は先づ其の住居の一部を改めて少くも勞作する部分を椅子卓式にし、朝より夕まで勞働時間は男女とも洋服を着し、夜間、遊宴、病氣、納涼、温泉、海水浴等、勞作以外の時には日本服を用ゐるを可となすと。余は和洋兩種の室を有するを以て最も好都合にして發達せる家屋の式となし、和洋兩服裝を其の適所に用ゐるを以て最も進歩せる衣服の式となすもの也。而して現實の日本は此の方向を取りて進歩しつゝあり。男子の方面には此の傾向餘程顯はれ居れるも、婦人に至りては男子より凡ての進歩に於て凡そ二三十年後れ居れば、婦人洋服の普及は尙ほ數十年の後なるべきも、遂に行はれずんば止まざるべしとは、余の觀測して豫言せんと欲する所也。

余は日本の最も進歩せる婦人に對し、奮つて洋服を採用し世評に頓着せず之を常用せんことを望まざるを得ず。而して余は其服の品質を餘り高價にせず誰れにも眞似し得る程度に於て始められんことを切望する者也。アメリカ人の不斷着は極めて廉なる地質を用ゐ居り、洋服とて左程高價のものには非ず。余は實地に之が見本を示さんことを企畫せんと欲せり。

新案料理數品

大石祿亭

△汁粉と牛乳

汁粉と牛乳は甚だよく調和するものです。若しも之へ少しくヴアニラの香でも加へるとまるでチヨコレートの様な風味が出ます、尚其中へ入れる餅を小さくし、大きな珈琲茶碗に茶匙をつけて出せば尚更妙です。牛乳を呑みたくても其香が嫌ひな人達は是非とも一度之を試して御覽なさい。

△鰻へ煉芥子

私は日外鰻の蒲燒へ芥子をつけて食べてから、鰻と言へは何時でも芥子が無くてならぬ様な氣が致します。これは啻其味の爲ばかりでなく、食べてからその消化を助けるからであらうと思ひます。

△ハムの粕漬

ハムを二分ほどの厚さに切り、酒の粕へ一週間漬けて置き、燒いて食べて御覽なさい、一寸面白い味になります。

△刺身とソース

醤油の無い處で、刺身へかけるのに他のソースは到底調和しませんが、唯マヨ子ス、ソースならば結構に食べられます。

△カレーの副物

カレー、ライスへ海膽と海苔をかけて食べると至極結構です。

△燕麥の漬物

これは海外に出て居られる人が、よく御存じの話ですが、米の糠を使はずして漬物を拵へる法は、其代りにオート、ミールを用ふる事です。

△摺身へ燒粉

魚の摺身へ卵や煮切でよく味をつけ終りに少しのベーキン、パウダーを加へて厚燒にすると、ふつくりと上がつて至極妙です。

西洋の野遊

晴好生

西洋の人達は殊に「野遊」を興として好んで居ります。風晴れたる日曜日などに、教會の禮拜を終へて歸宅してから、家族相連れ、各自に、良人が毛布を脇に挾めば、妻はサンドウヰッチ、コーンビーフ、平野水など入れたる「野遊の籠」と云つて皿、ナイフ、フオーク等の備はりたる籠を持ち、娘さんは紅茶とラムチの入りたる瓶を小籠に用意すれば、多くの子達は林檎、梨、蜜柑などとそれ〴〵籠に一杯詰め、番犬ジョンも、お祖父さんも、お祖母さんも、下婢も、家族のこらず樂しい笑談など言ひながら、三々五々、彼處に一團、此處に一群と道行くのに會ふのであります。

或は廣き野に、或は涼しき樹蔭に、或は海の涯に、或は展望遠く眼界廣き丘の上に、郊外いたるところ、此等の樂しき家族の團欒を以て充たされ、「こゝに吾々の家族」ある外は何事も打ち忘れて、又それ以上何の考へもなく、無邪氣に、面白く可笑しく、樂しく、靜かに一日を遊び暮すのであります。

（投書の一節）

鶯餅の拵方

石井泰次郎

（原料）寒さらし白玉粉百匁、水二合五勺、砂糖五十匁、青大豆粉二合、鹽二匁、晒餡（北海道一源製を宜しとす）五十匁、砂糖七十五匁、水二合、

白玉粉を大皿に入れ、水を加へて、手にてよく煉り合せて、ちぎるゝ程にして、鍋に入れ、炭火にかけ、砂糖を三匁位入れ、よく煉り合せ、又三匁位入れ、かく幾度にも入れ、木杓子にて善くねり、火よりおろし、さまし置き別に鍋に砂糖を入れ、水を加へて火にかけ、煮とかして、絹ぶるひにて別の鍋にこし込み、再び火にかけて、煮立て、其中へさらしあんを入れて煉り合せ、鹽を加へ、かたすぎぬほどにして、皿に取上げて、さまし、さめたる後に、白玉粉のねりたる方を、ねばり付かぬやう青きなこをかけて、適宜の大さにちぎり、一つ宛まるめ置き、あんの方も丸め、丸めたる白玉粉の方を、青きなこを付けて丸く平にのばし、あんを包みて、形を作り、皿に置き、なほ、青大豆粉に砂糖をまぜたるを、上へ一面にかけ、器に取り分て出すべし。

雪姫物語（下）

白柳秀湖譯

（五）盗賊の娘

花子の馬車は或日闇然とした森の中を走つて行きましたが、其車の光がキラ〳〵として、木立に深く潜んで居ました一群の盗賊の眼にとまりましたから、堪りません。

「オヤ、金の光だよ、金だよ」といふが早く、バラバラとかけて來まして馬の口をとゞめて、無慈悲にも花子を馬車から引き下してしまひました。

「マア何といふ綺麗な娘だろう、此子を喰べたらキット小羊より甘いに違ひないよ、エヽ一と思ひに料理してしまへ」と云ふが早いか、隨分慘酷な奴も御座いましたもので盗賊の一人は見てもゾッとする樣な短刀を逆手にふりかざして、あはや可愛らしい花子をムザムザ殺してしまおうと致します、他の盗賊はさもうれしそうに平氣で其有樣を立つたまゝ見て居りましたが

「アレ!!!」といふ女の聲、此時此盗賊の群に交つて居りました一人の稍年とつた女が自分の連れて居りました娘を背後の方へ隱して置いて氷の樣な刄の下をくゞつて花子の爲に命乞をして呉れましたので、花子は漸くのことで命拾ひを致しました。

「ちやうど妾の好いお友達だよ、此子はキット妾にあの綺麗な衣服も手袋も皆呉れて仕舞うよ、ねお母さん此子と遊んでも好いね」と如何に鬼の樣な盗賊の娘でも小兒の無邪氣さは一ッであります、人の肉を喫ふといふ山賊共もこれを見ましては、流石に心も解けましたのかドッと一度に笑ひました。

此盗賊の娘といふのは丁度花子と同じ位の年配でございまして肩の廣い、色の淺黑い、如何にも丈夫そうな小兒でございます、花子の手を受つて馬車へ乘りましたが自分で一鞭あてると車は、晝なほ暗い森の中に向つてかけ出しました『これから仲好くしましようね、妾お友達も何にもなしで淋しいのよ、ネ、あなたはお姫樣でしよう』「いゝえ、そうぢやあないの」とこれから

花子は馬車の中でこれまでの物語をくはしく致しますと盗賊の娘は非常に感心致しまして、お互に慰めあふて暫時の間に大の仲好しとなつてしまひました。かれこれする内に盗賊共の棲處へ着きました、見上げる樣な粗雜な大い建物で、壁は下から上まで頹れ落ちて烏や鵄が其の四邊一面に巣を作つて居ります、門の處には見てもゾッとする樣な野犬が牙をむき出して、人でも喰ひ殺しそうな顔をして居ましたが、娘に慣れて居ますので、吠えたても致しません、家の中には石床の上にドン〳〵と火が燃えて居ましたが煙筒がありませんので部屋一面に煙が濛々と致して居ります、見ると鍋の中には、さも甘そうな汁が煮えて、一方には、兎の肉が燒けて居ります。

やがて娘は花子を自分の寢室に連れて行きましたが、そこには部屋の横木の上に凡そ百羽ばかりの鳥がとまつて居ります、一方の壁には鳥籠がありまして二羽の野鳩が飼つてあります、これは、戸を開けておくと歸つて來ぬといふ事でありました、娘は隅から一疋の鹿

の、角を持て、引き出して花子に見せてくれましたが、娘の一番の仲好しだそうで、首には銅の輪がはめてあります、これもヤッパリ放して置きますと逃げて行つてしまうといふ事であります、娘は毎晩大な短刀を拔いて此鹿の頸を擽るといふことで今も娘は、棚の上の短刀をスラリと拔きまして、静かに鹿の頸の處を撫で廻しますと、鹿は可憐そうに、大そう怖がりまして、後足をバタ〳〵と致しましたが、娘はこれを見て一方ならず喜ぶのでございました、娘は此短刀を片手に持ちましたまゝ花子の手を取つて、床の中へ入ろうとしますので花子はビックリ致しまして、顫へながら聞きました。

「マア、あなたは毎晩其短刀を持つたまゝ寢るのでございますか」

「そうするのよ、だつて夜中にどんな事が起るか知れやあしないもの！」と申しまして平氣なもので片手を花子の頸の處にかけましたが、最早スヤ〳〵と寢てしまひました、花子は眠る處か魂も身に添ひません、

生きて居るのやら、死んで居るのやら、夜更けるまで起きて居ました、臺處の爐の周圍では鬼の様な盗賊共が車座になりまして、飲むやら歌ふやら、大騒ぎ、さつきの女などは立つて踊つて居るやうであります。マアどんなに恐ろしかつたでございましよう。

夜も深く、人も寝靜まりました時でございます、壁の上にかけてございます野鳩が、先程花子が寝物語に娘に話した、蝶太郎のことを、聴いて居りましたものと見へてクークーと鳴き出しました、花子は何事かと籠を見ますと、鳩は『私は蝶太郎さんの居る處を知つて居ますよ、あの子は、白鳥に橇を曳かれて、雪姫に連れられて行つてしまつたんですよ。私共が森の上に巣を作つておりました時、上を走つて參りましたが其爲に、私共の巣は皆壊されて、可哀そうに雛鳥は、其時殺されてしまひましたんですよ』

『それで雪姫はどこへ行つたの？、知つて居るの？』と花子は、思はず問ひかゝりますと、『そうです、此世界の北の北のズッと北の邊にもう年中、雪と氷で埋ま

つて居る處があります、雪娘はそこに住んで居るのでしよう、そこに居る鹿さんが其事は一番よく知つて居ますよ』

『そうです、そこは山も谷もない一面の雪と氷の野原でございまして實に立派なものです、雪姫はそこに大かたは、夏中陣を張つて居りますが、ホントの城といふのは、それからヅーと北の果ての北極といふ方にあるのでございます』

花子は、此話をきゝまして、もう悲しくなつて仕方がなくなりました、此時丁度娘は、鹿の話聲で眼をさましましたが、靜かにしないと、刀で撫でるよ、と申しましたので鹿は其まゝ默つてしまひました。翌日の朝を待ちかねまして花子は、其事を娘に話しますと、娘も大そう氣の毒に思ひまして、鹿に雪姫の居る北の邊といふのを知つて居るのかと尋ねますと、鹿はさもさも得意そうに、『それは私より他に知つて居るものは、ありますまい、私はもと其邊土で生れましたので、雪と氷の野原を自由にかけまはつた者でございます』と

答へました。
『マアお待ちなさい、もう家の者は皆出て行つて私のお母さん計りですけれど、晝になるといつも酒を飲んで少時寢ますから、其時には、どうかしてあげましよう』恁ういふて娘は、床を出て行きましたが、晝になりますと、女は酒を飲みまして、グッスリ寢入りました、娘は此時靜かに鹿の束縛を解いてやるにつけて、云ひきかせました。
『妾がおまへの頸を此刀で撫でると、おまへが、アンマリおかしい風をするから、大變面白がつて、每晩してやつた、けれど、もうこれからしないで今日限り、放して上げるよ、其代り、此娘さんを連れて出來るだけ早く其北の邊の雪姫の居る處へお供をしなくてはいけないよ、そこに此娘さんのお友達が居るんだからね、いゝかえ』
鹿はもう嬉しがつて踊りまはつて居ります、娘は花子を、シッカと鹿の背中に、載せまして、足には、お姫樣から戴いた、靴をはかして呉れましたが、手袋はあ

まり美しいので返しません、其かはり、お母さんの腕套をくれました、花子は娘の親切に感じて涙を流して泣きました。いよ〳〵別れる時に娘はパンと燻肉とを鹿の背にくゝり付けて呉れました、戸をあけて例の短刀で鹿の束縛を解きながら、くれ〳〵も花子に氣をつけよと云ひきかせました。鹿はもう勇んで一目散に故郷の空をさして走り出しました、『さよなら』『御機嫌よう』とおしい別離を告げまして花子は、森や、野や、沼を、矢の樣に、走りました。狼の聲、鷲の聲、何とはなしに聞き流しまして、何時しか、北國の野に來ましたものと見へまして、美しい北光は、赤々と空にかゝりました、娘がくれました、食物がなくなります時分には、鹿は少女を載せて、いよ〳〵邊土につきました。

(六)天使の援軍

鹿は少女を載せて漸く目的地に着きまして、或る小い掘立小屋の前に留りました、此小屋と申しますのは屋根が地につきそうで、出入には手と膝とで腹這ふて入

らなければなりません程でございました、此小屋の中には一人の年經つた女が鯨油の燈で、何か魚を料理して居りましたが、鹿は此女の前に參りまして花子の顛末をくはしく話して聞かせました、老女は花子の境遇を大變憐みまして、申しまするには、雪姫の居る處はこれからまだ百里も先だ、そこには、此老女の知つて居る者があるので、その者に聞いたならば、好く分るだろうといふことで、老女は紙のかはりに干鱈の上に何やらサラ〱と書いて呉れました。凍えと飢とに人心地もありませんでした花子は、此小屋で身體を温めさしてもらひまして、少許の食物をたべて、鹿をたよりに教へられた方を指して一目散に急ぎました、終夜、眼もさめるやうな北光の美しい青い光を仰ぎ乍ら花子はトウトウ百里の途を老女に教へられた通りに行き着きました。見ると雪の中に老女のいふた小屋がありまして、戸口らしい處に煙筒があります、花子はホトホトと戸を叩いて、案内を頼みますと、此家の主婦が出て來て喜んで内に招じて呉れました、室内は室外の寒

さに比べて、其温いこと主婦もヤット衣服を着て居る位でございました、此家の主婦といふのは丈の低い色の黒い醜い方の容でございました。主婦は親切に花子の上衣や腕拔きを脱して、鹿には外から氷の塊をとつて來て頭にのせて呉れました、干鱈の上に書いてあります文字を、口の中で繰り返して讀んで居ました、主婦はやがて其意味が了りましたものと見へて干鱈を汁の鍋の中に入れてしまひました、此處は世界の北の端で食物と見ましたらどんなものでも決して粗末には出來ませんものと見へます。鹿はまづ主婦に自分の身の上話からして、花子の事まで殘らず話して聞かせました。主婦は其怜悧そうな眼をしばたゝきながら默つて考へて居ましたが、鹿は又申しました「主婦さんどうか貴女の工夫で此花子さんに十二人前の力をつけてあげて、雪姫に勝たせる法はありますまいか」

「十二人力！、マアそんな力を何にするんだろう」と主婦は、眉をひそめましたが、棚の上から何か奇妙なもの〻書いてある柔革の卷物をとり出して、ヂツと覩

に汗が流れる程熱心に見つめて居ましたが、鹿が傍から折入つて少女の事を頼みますので、主婦はやがて鹿を部屋の隅につれて参りましてサテ話すやう「蝶太郎といふ少年は私が見ると今僅かに雪姫と一處に居る事が分りました、けれども最早雪姫の傍は離れますまい何故とならば、實は恐らしい惡魔の鏡の破片が彼兒の眼に入つて居るので、スツカリ氣が變つて居るのです、彼兒を取り返すには、眼の中の破片を除去つてしまはなければいけません」と。鹿はこれをきゝまして、猶更花子に力を添へてやつて呉れないかといふ事をせまりますと、主婦は靜かに申しました。

「妾はもうどうしても彼少女に、今彼少女が持つて居るより強い力を添へる事は出來ません、彼少女の無邪氣な心、温い友情、これが何よりも強い力ではありませんか、御覽なさい彼少女にはどんな人でも獸でも皆これまで非常な力を添へたではありませんかあんな繊弱い躰軀をして跣足でこんな世界の端までも尋ねて來たではございませんか、こゝから二里先

に参りますといよ〳〵雪姫の庭園があります、おまへさんはこれから彼少女を連れて、雪の積つて居る雜木林の下の赤い苺が實つて居る草の上へ置いたまゝチツともかまはず、ドシ〳〵こゝへ戻つてお出でなさい、出來る丈け早くね、いゝかね」

鹿も心ありげの主婦の語に、早速承知致しまして、花子を連れて、一足飛びに件の苺の蔓の上に置いたまゝ歸つて参りました。

花子は、可憐そうに靴も手袋も何にもなしで、雜木の下の雪の上に置き去りにされましたが、こゝぞと乙女ながらの勇氣を振り立てゝ前の方へ突き進みました、雪姫の守衛でありましよう、地を捲いて來る吹風雪の激しいこと、卍巴と狂つて少女の園に渦きかゝつて参ります、豪猪のやうなの、毒蛇が鎌首をあげた樣なの、大熊が荒れたやうなの、それは色々恐ろしい形をした雪の塊が、此優しい一人の少女を四角八面にとり圍みまして呼吸もつがせずせめたてます、花子も今は一生懸命、心に大神の名を呼びまして、御祈禱を始めまし

た、すると不思議、少女の口から出ます呼氣がムラムラと白く、立つよと見るうちに、それがアリ〳〵と天使の形になりまして、やがては數かぎりなき兵士の一群が現れました、此天使といふのは片手には槍をさげ片手には楯をかざして少女を苦しめかゝる大雪小雪に打つてかゝりまして粉末微塵に打ち砕きます、花子も之に力を得て、かの雪姫の宮殿さして、さも勇ましく進むで參ります。其壯嚴な働きは、何と申しましようか、實に筆にも口にもつくされぬ程でございます。

（七）故郷の春

宮殿の壁といふのは、恐ろしい吹風雪で、窓も戸口も身を切る樣な風で、中央には五六里に亘る雪と氷の大廣間がございまして、其中はもう只眩惑のする樣な銀色の光と、呼吸も絶えそうな寒さとで、何一ッ目先の變つた物もございません、此雪と氷の大廣間の中央に一ッの湖がありまして、固く巖鐵のやうに氷つて居ります、雪姫は平生、其上に生活して居ますので、此氷つた湖を呼んで『理論の鏡』と申します。

蝶太郎は、もう寒さの爲に青褪めて、黑くなりかけて居ますけれども、雪姫に接吻されましてから以來身體はまるで氷の塊のやうになッて居ますので、一向に其寒さを感じません、蝶太郎は此湖の上で、いろ〳〵な形の氷をあちこちと組み合せまして、何かの形を發明して見ようと思ッて餘念ありません、理論の氷遊戯といふのは、これでございましょう、蝶太郎の技巧はなか〳〵甘いものでございます、いろ〳〵な文字の形を組立てゝ喜んで居りましたが、只一ッ少年がいかに考へて見ても工夫の出來ない文字がございました、それは外でもありませんが『永劫』といふ文字でございました、雪姫が申しますには、もし其字が出來たならば偉いもので、其代りに世界を皆と新しい氷靴とを一足くれると申しました、けれどもそれは到底分りません。

『もう妾は温い國の方へ旅立つ季節が來ました、これから南の方へ出て、高い山の頂を白く飾つて、野の葡萄とレモンを色づけてやらなければなりません。』と雪姫はある日蝶太郎に申しましたが、其まゝ少年を此

湖の上に殘しまして、南の空遙かに旅立つてしまひました。

花子がいさましく宮殿の門を破つて入つて參りましたのは此雪姫の留守の時でございました、少女は口に祈禱を捧げながらいよ〳〵奥深く進んで參りましたが漸くの事で此湖の處まで尋ねて來ますると、蝶太郎は青黑くなツて、獨で氷の塊を組立てゝ居ます、此時の花子の喜びはどんなでございましたでしよう、もう何事も忘れて仕舞ひまして、ワツといふたまゝ蝶太郎の腕にすがり付きまして『オヽ蝶さん!!!蝶さん!!!』と申しましたまゝ、涙に聲もたち得ません、處が蝶太郎はどうしたものか、そんな事は一向平氣なもので、冷たくなつたまゝ錄々返事もいたしません。

海山幾萬里といふ旅を苦勞に苦勞をして、茲まで尋ねて參りましたのに、蝶太郎の此有樣―たとへ惡魔の仕業とは云ひながら、あまりの事に花子は胸も張りさけるばかりになりまして、蝶太郎の胸に顏をおしあてゝ、熱い涙をハラ〳〵と流して忍び泣きになきました、す

ると其涙が少年の胸をあたゝめて、心の中に入つて居ました鏡の破片を溶してしまひました、蝶太郎の胸にありました鏡の破片が溶けましたので、少年の眼には朦朧ながら美しい花子の姿が見へて來ましたから堪りません、『花ちやん!!!どうしたんだろう』と申しましたが、ワツと泣き出しました、此熱い涙で蝶太郎の眼に入つて居ました破片も流れ出してしまひましたので、忽ち少年はもとの、優しい、温和な蝶太郎にたちかへりました。二人の歡喜はどんなでございましたでしよう、只もう手に手をとつて泣くばかりでございました。

それから二人は喜び勇んで宮殿を立ち出でまして例の苺の蔓の處まで參りますと、先程の鹿が何時の間にか、他に一疋の若い鹿をつれて來て待つて居ました、見ると風もやんで、どうやら日の光も美しく輝いて參りました、鹿につれられて、色の黑い主婦の小屋まで引返しまして、そこで用意をとゝのへて、また先に立ちよりました、老女の住家まで引返して參りますと、老女は二人の爲め新しい衣服と、橇とを調へて置いて

くれて、二疋の鹿は國境まで二人を送つて來て呉れました、此處まで參りますともう草木もございまして、丁度春の若芽の萠え出る季節でございました、森の中を參りますと久しぶりで樂しい鳥の歌聲も聞えまして其愉快なこと、それは云ひやうもありません。

折から森の下蔭を一臺の馬車が驅けて參ります、花子は何となく見覺へのある馬車でございますから見ますと、それは先の日の盜賊の娘でございました、娘は、森の中の淋しい棲處に居たゝまりませんで、花子にもらうた馬車に乘つて、世界漫遊に出掛る處でございました、それでこれから第一に北極の方へ行つて見る處だと申しました、それから花子と娘の二人は暫時緣の木蔭で昔の事を話しまして、花子は久しぶりでかのお姫樣や烏夫婦の消息もきゝました、かくて二人は娘に、もし故郷の方へも巡つて來たならば、きつと訪ねて呉れと堅く約束しまして、惜しい別離を告げて、さも仲好く手に手をとつて、花咲き香ふ春の野邊をなつかしい故郷の空に急ぎました。

二人がやうやく故郷の都に立ちかへりました時は、うらゝかな夏の初でございました。青空に高く、あらはれて見へます寺の塔は昔のまゝで、遙かに聞えて來る

鐘の高調も何となく樂しそうであります、花子の家の二階には、例の古い柱時計がカチ〳〵と音をたてゝ、窓の薔薇は昔にまさる色香に咲き出でゝ二人のかへりを迎へるやうでございます、ソト見ますと二人は何時の間にかヅッと丈も延びまして、立派な處女と青年とになつて居りました。花子と蝶太郎はなつかしい昔の窓に椅子をよせて、互に手に手をとつて、ほゝ笑みました、二人はまだ少年のまゝの心で、昔の仲好しの友達でございます。

久し振りで無事な二人の顏を見た、互の兩親を始、花子のお婆さんの喜びはどんなでしたでしよう、思ひやられる事でございましよう。

冬の氷にとざされた、悲しい二人の夢は其胸から消えて、いまはあとなくなりました、青葉、若葉の日の光すが〳〵しい初夏の空に二人の心はいよ〳〵聖く美しいものになりましたといふ、これが雪姫物語の大團圓でございます。

（完）

「我、まことに爾曹に告げん、もし改まりて嬰兒の如くならずは、天國に入る事を得じ」

人不知

△こは是れ予が十餘年前に書きたる小說中の數節なり。予は今偶然此の舊稿を讀みて、感慨禁ずる能はざるものあり。文章拙劣、殊に稚氣を帶ぶること甚だしと雖も、當時予は實に涙を絞つて此文を草せしなり。此文は即ち予の懺悔の一種也。諸君願くは此の舊稿を錄するを許せ。

堺　利　彦

（一）

霰まぢりに小雨ふる寂しき夕暮、菅村の老婆は猶ほ只一人「益は又迚も早くは歸るまい」と獨語ちて、冷たき昨日の飯の殘れるに夕餉を濟まし、明日の朝炊くべき米を洗はんとて、米櫃の底をかすりて五合桝に僅に一杯。裏口に出でゝ其れを洗へば、降りかゝる霰の玉の亂れたる白髮に止るも淒し。

やう〱暗うなりゆくに、米洗ひを終へて鎖戸などして、古風なる丸行燈の下に例の大和炬燵にあたり、又粉煙草を詰まりがちなる煙管にくゆらす。隣には子供おほしと思ぼしく、笑ふ聲、叫ぶ聲、ドタバタと走りまはる音などす。それがやう〱に靜まれば、此度は大人達が樂しげに面白げに物語する聲聞ゆ。此方は炬燵に俯伏したる老婆一人、押入には鼠の物音、家の中漸く暗うして佛壇の燈かすかなり。

霰のサラ〱と笹の葉に音たてゝ一しきり降りまさるに、老婆はフト首あげて、やがて起ち上りて痛げなる腰を伸し、アヽアと大息つきながらして又佛壇の前に坐り、鉦の音かなしく觀音經を誦しはじむ。是が夜毎の務にやあるらん。

是れも終りて又炬燵に物思の時を過す、生甲斐も無き身を何まで生きるやら、如何なる宿世の惡因ありて斯うまでも今世の業を曝す事か。淺ましい眞の其日生活をして、と云うて誰を恨まう。思へば益之助も氣の毒、若い身に重荷を持たせられて、足手まとひがあれば思ふ程の事も出來ず、放蕩は渠が缺點なれど、若い者の渠一人然うとも限らず。さりながら人の口の聞きにくや、我あるばかりに益之助に不孝者の名を付けさせる。それはモウ渠が今少し家持氣になつて呉たら眞に嬉しい事ではあれど、渠とて萬皿素氣ない心ではなく、隨分柔しい氣もあるなれど、何を云うても若盛、血氣に任

せて飛びあるくゆゑ。我には只渠が身が痛はしい、あまりの事と腹の立つ時も無いでは無けれど、それも又尤もかと思うて見れば、叱ッた後で出て行く後姿が只可愛い。自分でも云ふ樣に、我か眼で見ても渠が人に劣るほどの馬鹿でも無し、思まゝに自由にさせたらは、又立身も出來ようものを、斯うして足を縛られては、一日々々に生活は詰りて評判は惡く……………ア、何時まで生きる我身やら、

消えんとする佛壇の燈を涙の眼を見つめたりしが、やがて又打伏して啜りなく。霰は猶サラ〳〵と降りまさる。夜はやう〳〵更けて隣も今は寐たるらしく益之助は何處にかあるらん未だ歸らず。老婆は急に身を起して涙の眼をカッと見ひらき、立ち上りて佛壇の前より取出だすは古びたる短刀。炬燵おしのけて行燈の前にジッと坐り、眼を閉ぢて少時は南無阿彌陀佛々々々々々々。やう〳〵に短刀持ちかへておもむろに、抽出だすや鍔元一寸、キラリと光るに又バッシリと鞘に收めて吐息長し。やう〳〵に又鯉口くつろげて徐ろに抽き

はなし行燈の火に打眺め〳〵。やがて又急にガラリと擲棄て、身を横に炬燵に倒れ『アゝア、年寄ッつは自害する氣勢も出ぬ…………それに又、母親が貧に迫ッて自害したと聞えては、益之助の名にもかゝる。オヽ又霰の酷う降ること、益之助の歸途が嘸。

（二）

『益や、コレ益之助、お前も久しく苦勞したの、若い獨身に老人と云ふ重荷を負はせて、永いあいだ厄介をかけたが、モウ私も今度は終が來た。アレ〳〵阿彌陀樣のお迎が見えるやうな、南無阿彌陀佛々々々々々々、ア、早う此の苦艱が逃れたい。生きて居れば自分も苦み、お前にも足手まとひ、死なうと思うて短刀まで拔いた事もあるが、コレ益之助、年を取つては自分からは死なれぬ、それに矢張お前が戀しゆうて別れともない、毎日々々出て行く後姿を見て泣いて居たが、今度は私から今世をお暇乞にする別と思へば、戀しい、懷しい、別れともない。ア、又胸の切なさ、善う介抱して與れるの、嬉しい、嬉しい。お前の手に凭れて死ぬれば、

それで滿足、モウ是で厄介になりじまひ。益之助、是からはお前が自由自在、思ふほどの事して立身して下され、何の〳〵貧も苦勞も因緣事、今度の病中に柔しう介抱して吳れたで、私はモウ此の上もない滿足。只是まで永のあいだ若い身體を引止めた其の上に、又此の病氣やら後の事やら、入費をかけるが氣の毒な、只灰にして貰へばそれで可い、決して〳〵無駄な事して下さるな。何の〳〵お前が濟まぬ事は少しもない。ナニ人が、人が何と云はうとも、私はお前に不足は無い。お前の事を人に其のやうに云はせたも、私が永う斯うして居たからの事。是からは自由の身で、思ふはどの事して、見事菅村の家を興して下され。ア、氣が遠くなる、夢ぢややら現ぢややら、益之助、益之助、後から抱いて下され。オ、心地か好い、お前に凭れて斯うして參ろう、南無阿彌陀佛々々々々々々。

此は是菅村益之助が母お浪の臨終の言葉なり。お浪は霰ふりし夜の明方より熱を發して、持病の痰に苦みたりしが、醫者は視て肺炎なりと云ふ。日に夜に重りて

醫者は危しと云ふ。益之助は一睡もせずして看護すれど、何分男の手一つに任せず、急に女を雇入れて貧き中に苦しき事おほし。されど幸ひにも學校に好き都合ありて何某かの金を得たれば、先づ兎も角もして介抱に一心なり。益之助には疎き親戚も、お浪の重病には流石見舞ひ來て、夫のお幾も二度三度。

病はひたもの重りて七晝夜續きぬ。今はいよ〳〵危しと醫者も云ひ、人も思ひ、病人みづからも早や是までぞと悟りぬ。今宵こそは明日こそはと死を待つのみなる夜の寂しさ。悲しさ。されど益之助は只悲しみてあるべき身かは。親の上を淺ましけれど、今より送葬の事の心工面も貧ゆゑなり。益之助は此の時只一つの賴なる星野が許に使を立てゝ今宵必ず來て吳れよと招きたり。されど其れもまだ來らず、見舞の人も夜は無くて、只寂しく悲しきに、母は改めて我に長物語。之を遺言ぞと聞くが中に、容體いよ〳〵惡しくして、南無阿彌陀佛の聲と共に急に咳きあぐる痰に喉つまりて、其のまゝに息は絕えぬ、脈は絕えぬ。枯枝の力もいらずポ

ツクリと折れたるにも似たらんかし。

（三）

益之助の母は終に死せぬ。形式ばかりに醫者を招きたれど固より甲斐なし。親戚にも人して報知せたれど今宵は來る者もなし。益之助は亡き人の臥床に古屛風建てまはして、枕元に心細き燈明をあげ、線香たきて合掌するもあはれなり。それも終れば、屛風の外に小さき火鉢を擁して薄暗きが中に只瞑目す。時々長き息を吐きながす外には事もなし。雇の女は次の間に坐眠やすらん。

夜は十時となり十一時となる。益之助は猶只瞑目して坐せり。吐きながす息やう〳〵繁くして思に堪へぬが如く、終に立上りて何をかする。佛壇の前より取出だしたる普門品、亡き人が誦しなれたる物にやあるらん。益之助は堪へぬ思を打濕りたる聲にこめて普門品を誦しはじめぬ。第廿五の卷を二度繰返せば夜は既に十二時に近かるべし。雨や催せる生暖かき夜半の心地厭らしく、風もなくて四隣寂たるに、亡き人と共に此の世

を放れて遠く深く落入りたらんやうに覺え、又瞑目合掌する益之助が耳を破りて、轔々と駈けつくる車一輛、眼を開きて此の世に返れば星野長太郎が親しき顏、我を奈落より救はんとて來りしか。

星『何うかネ、御病人は何うかネ。

益『モウ此の通りだ。實に待つたよ君を。

星『ア、然かネ、それア何うも………………何故モット早く知らせなかッたらう。僕アね、今夜遲く家に歸ッたところが、君の彼の手紙だらう、驚いて直に車を走らせて來たのサ。ハア、然かネ、それア何うも、思ひがけが無いからネ、僕も驚いてネ、然しマア今となッちやア只後の始末サ。

星野はやうやく小火鉢の側に坐りこみて、病氣の次第など問ふ。益之助は逐一を語る。薄暗き屛風の蔭、斜にさす燈明の光、室には滿ちたる香の煙、二人は消えんとする火鉢の火を圍みて、共に沈みたる聲の調子ものがなしく、新地に酒を使うて快談せし樣には似ず。

『何故モット早くから僕に知らせなかッたのかネ、短

くもない病中に、と星野が曰へば『實はナ、君の處に駈附けやうと思うた事もあつたが、丁度さいはひに學校の方で少し金を與したからナ、それでマア行ッて置いて、ツマリ醫者も六かしいと云ふのだから、最後を君の處に持ッて行く積で、それで今日まではマア默ッて居たのだがナ、と益之助は俯向きたり。

星『デ、少とは金があるか子。

益『無いサ、殆んど一文も無いサ、只君の來るのを待ッて居たのだ、我輩今は全く君に賴るより外は無いから。

光を後にして坐りたる益之助の顔は、今星野が一吸すひたる卷煙草の光に照らされて、いと凄き色を現はしたり。

星『可し、菅村、心配するな、僕が一切引受けてやる、君は只喪主でジッと愼んで居れば可い、會計萬端僕が引受けて、明日一日詰切でやらうから子。安心し玉へ君が母を葬るに就いての體面は確に僕が保つやうにするから子。

星野が又一吸すひたる煙草の光に、益之助の顔はいよ〳〵凄く、ホロリ〳〵と涙さへ飜れたり。

益『ウム、實に有難い、何にも曰はん只よろしく賴む。萬策が盡きて居るから、厭と云ッても君に縋る積であッた、それを進んで君が然云ッて與れる、我輩は何んなに嬉しいか知れん。厚かましいが一切賴む。平素の貧乏は我輩少とも耻ぢん積だけれど、君が云ふ通り母を葬るに就いての體面、此に至ッては男子として餘り腑甲斐ないからナ、生きたる母には飽くまで不孝を盡し、死したる母を葬むるには禮を捨てると云ふに至つては、實に不孝の極で、如何に我輩と雖も…………決して華美な葬式には及ばん、只一通りの禮を缺かねば其れで可い。賴むよ星野、實に我輩は…………

益之助は終に涙に咽ぶ。星野は懐中をさぐりて銀貨三つ四つ取出だし『菅村、オイ菅村、酒を買はせんか酒を。酒を飲んで語りながら夜とぎを爲うぢヤ無いか。

（四）

坐眠の女を起して酒買ひにやれば、途中より雨にあひ

て駈けもどる。大儀々々と星野が今より主人ぶりて『肴も要らない、燗も要らない。德利のまゝで茶碗を二ッ、オッと可しく。お前はモウ寢るが可いよ、と行屆きたり。

燈明の心を掻きたてゝ、冷酒を茶碗に酌みかはしながら、風さへ添ひたる雨の音を打聞く寂しさ。屏風の内には尊き人の骸冷えゆく。

『困るねヱ明日が、此の天氣ではと星野が途切れたる話を繼げば、默したりし益之助、結ぼるゝ思の端緒を引出されたるが如く『雨もふれ、風もふけ、何うせ世の中は飽くまで我輩に逆らふのだから、試に何處までも我輩を苦めて見るが可い。世の中に勝つ事は出來んか知らんが、負けて屈する事は決して爲ん。

星『オイ〳〵、然憤慨したッて致方があるまいぢャ無いか、雨風にまで當ッて拗ねて見た處で、何も雨風がわざ〳〵君を……………

益『イヤ我輩を苦しめるのだ。數年來の我輩の地位に立ッて見玉へ、君と雖も此の感が起るに違ない。財產

を奪ひ、自由を奪ひ、親を奪ふ……………

星『不可、不可、それア不可。君は今然激すべき場合で無い。愼んで喪に服して、一には自ら安んじ、一には母樣の靈を安んせねばならない。今夜の夜とぎは殊に靜に語つて明すのが當然だらう。子君、悲むは善いが激するのは不可。

星野は頗る大人らしく益之助を說く、益之助は悲みを酒に激せられて、數年の不平一時に心頭に至り、勃々として憤怒りたり。

『處で何うだ子、明日の事は僕が一切引受るは可いが、親戚の人達もあるだらうから、僕があまり出過ぎても何うだらうかと思ふが子、と星野は話を他に轉す。

『ナアニ、親戚なんぞ構ふものか、友達が一二人來るだらうから、それを使うて君が善いやうに計うて呉れ玉へ。我輩は親戚は實に好かん、親戚は名ばかりの交際で、一滴の人情もありはせん、彼方でも止むを得ず來るのだから此方でも止むを得ず待遇へば其れで可いサ、ナニ親戚が役に立つものか、我輩は實に親戚は嫌

だ。
星野は態と話を轉じたれど、益之助は茲にも亦憤慨をはじめたり。星野も今は爭はずして只聞きたるに、益之助やう〳〵調を變じて「然しなア星野、今度でも親戚に泣付けば、それア葬式の費用くらゐ何うともして呉れるサ。然し、その泣付くのが我輩には出來ん。若し又泣付かうものなら、恩に着せて、厭味を言うて、小言を並べて、それが癪にさわるから我輩も親戚には賴りたくない。そこで君の助を得て、我輩は其の親戚共に對して何程威張れるか知れん。實に我輩は嬉しい。親戚の奴等は我輩をごろつきのやうに思うて居る。失敬ぢやア無いか、落魄しても一個の男子、その落魄の爲めに人を輕蔑する、失敬ぢやア無いか。それに何うして我輩が頭を下げて世話になれるものか、寧ろ母の死骸を擔で行つて野に棄てやうとも、決して彼等の世話にならうとは思はん。
少時は調を變じたりしが、終は又激語を吐きて凄じき眼の色したり。

星「可いぢや無いか、それほど厭なら少しも世話にならずに行るサ、屛風一重を隔てゝ御母樣の亡骸にそんな言葉を聞かせなくても可からうぢや無いか。
酒の爲か悲みの爲かは知らず益之助のあまりに激したるに、星野は慰むるが如く誨ふるが如く、をだやかに合槌うつ。
益「アヽ然だ。我輩は只何だか癇が立つて堪らんがナ。實に母には濟まんサ、幸ひに君が居つて呉れたからこそだが、厭な顏をする親戚に泣付かねば葬式が出來んと云ふ次第だから、實に君、子として濟まんぢや無いか、隨分永いあいだ母を苦しめたからナ。然るに母は我輩に永いあいだ厄介をかけたと云ふぢや無いか。實に親と云ふものは有りがたい、此の不孝な兒を、なア君、又委しく話しもするが、今夜臨終の時遺言を聞いたがナ、實に我輩骨身に沁みた、母は我輩の足手まといになるからと云うて自殺しかけた事があるのだ、我輩はそれ程までの事があらうとは思はなんだが、臨終に聞いて實に驚いた。堪らんぢや無いか君。

鷄は早や鳴きたちて夜は明けんとす、激したる益之助は靜まらんともせず、一升の德利やうやう輕うして語ますく激す。星野も今は慰めんともせず、感に擊たれて息のみ長し。男の交たのもしくもあるかな。

（五）

夜明けて幸ひに雨は止みたり。友達の誰彼、親戚の誰彼、貧しき家も流石かゝる時には人々集りて、何呉と明日の葬式の用意するに、益之助は只例の屛風の外に坐するのみ、萬事は星野が切ッてまはす。迷惑ながら何れ何某かの出金は免がれまじと内々言ひあはせて來し親戚の人々は、少し此の體に意外なるべし。

先は何事も滯りなく調ひて其の日の暮るれば、星野の外は人々皆歸り去りて、後は又降り出だす雨に一家寂たり。二人は又酒を酌みて語ること多し。益之助は親戚逹の志しの深さ淺さの印なる香奠を披き見るに、一つ腹立たしくも情なきは、我が書きし金子借用證の入りある也、何事ぞと引裂きて又憤るを星野に慰められ『ハヽヽ、是が世間の人情だらう、と笑ふ聲陰にこもれり。

かくて其の夜も明けたれど生憎や雨は止まず、雨の止まねばとて葬式を止むべしや、人も揃ひ事も整ひて十二時過ぎたる比、雨は意地わるくも降りしきる。少し時刻を延さんと云ふ者もあれど、益之助斷じて聽かず。益之助は木綿羽織の黑の紋付に白地の小倉袴、足袋も穿かず帽も被らず、禮は是にて足れりと云ふ。星野がわざく袴羽織を取寄せて、自分はフロックコートを着るべければ、是非とも君は是を着よと勸むれど聽かず。

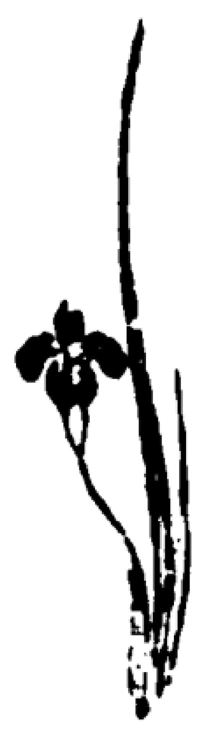
降りしきる雨の中に今送葬は出でんとす。御僧は固より車、婦人にはお幾とお幾が母、是も固より車の事、その他の親戚友人皆車なり。星野も車を呼びながら益之助にも乘れと勸む。益之助は聽かんともせず、されど此の雨の事ゆゑと勸むれど斷じて聽かず。

さらば傘をと雇の女が持出づれば其れをも取らず、袴の股立高くとりて跣足の供。帽だに被らぬ頭に雨の降りそゝぐに、人々見かねて又傘を勸むれど斷じて聽か

す。強いて勸めし友達の何某は怒聲に叱りつけられ、終にそのまゝ葬儀は出でぬ。

固より華美を避けて飾を殺ぎたる送葬、油桐かけたる棺に幌おろしたる車のつゞける樣、雨中に何の見榮も無けれど、此の家より出づる葬儀として恥かしき事もあらざるべし。殊に喪主たる益之助、綿服の質素なるも床しく、傘さゝず下駄はかず、髮も顏も襟も裾も雨の手も、全身ぬれにぬれて滴したゝれど、寒しともせずして容を壞さず、愁然として棺に添うて歩む樣、道行く人の眼をぞ引くなる。

斯くて安部野に着きて火葬あり。ぬれにぬれたる益之助が佛前に向いて燒香する其の姿、心知れる星野は特に哀と感じ、さらぬも取々に哀とは見けんかし。されど久しく此の人を憎み厭ひし眼には、猶之を特更の擧動と見て、嘲る聲も聞えけり。



夫に家庭雜誌を讀ませる法

私はいつも家庭雜誌を讀みまして、それを私の夫の事に思ひくらべますと、實に實に適切な、胸のスッとする樣な事が御座います。處が夫は中々雜誌など見ようとも致しません。そこで私は或日夫の留守に、雜誌を夫の机の上に置きまして、こゝを讀ませたいと思ふ處をあけて置きました。すると夫は歸つて來て、洋服をぬいで机の前に座るが否や。勿論何の氣もつかず、さも邪魔な物の樣に、雜誌をたゝんで机の脇に投げやりました。私モウそれでガッカリ致しました。何とかして夫に家庭雜誌の讀ませる法は無いものでせうか。記者樣に伺ひます。

みよ子

記者樣

貧と愛情

（一婦人の身の上ばなし）

西村渚山

二月△日の夜、世間は前田家の大廣間で三々九度の大慶事が行はれた事を知つて居ませう。それから越えて二日、私は世話する人のあるまゝに、下町の或る白米屋へ後添の妻として再縁した。恐らくこれを知る人と云へば、世話人と自分自身と位なものであらう。私、今茲三十二、去年良人と別れた時、既に九歳頭に三人の子持でありました。熟々私の越し方を回顧つて見ると、目に入る限り物寂しい砂漠も同樣で、今日迄歩んで來た道筋は私自身の選定でなく、況んや明らかな理性の命じたところでは勿論ない。唯周圍の事情の運び行くまゝ、自然の力に誘はれるまゝ、主となるべき私はほんに一廉の盲人でありました。而も、其の盲目は今後何時迄續くのであらうか。多少世の中の苦勞を覺え、多少自覺も出來、意志も出來た今日に於てさへ、

尚ほ妾の一身を取捲いた樣々の事情と境遇とは、飽くまでも私に自覺の人となり、意志を持つ婦人となる事を拒むのであります。最初の結婚は私の意志でなかつたが、併し此度の再緣も決して私の意志ではない。萬事は不如意が主因です。不如意が萬事を支配する世の中です。私のひねくれた人生觀も、子供に對する愛情の念も、廉恥心も、良心も、『貧』の爲めには何等の力も持ちませぬ。

一言にして申しますれば、私の第一結婚は死んだ良人の見得の爲め、畢竟十幾年間手中に弄ばれて居たのですから、人形の結婚でありました。これに反して、今度の再婚は、良人の方からは下女代り、私の方からは命を繋ぐ一方便――只これ切りです。だが、孰れに致しても眞實の愛情と云ふものは其間に微塵もない。從つて光明もなければ希望もなく、精神もなく、單に肉體が相寄つて存在して居ると云ふより外に道がないので御座います。これが砂漠でなくて何としませう。これが不幸でなくて何でせう。言ひ古るした言葉です

が、男子は左の手に愛は失ふとも、何は右の手には野心があります。功名心が燃えて居ります。引代へて女子は全身これ愛、愛は質に女子の全體ですもの。いざや、私はこゝに少しばかり、過去と現在の身の上話をお聴に入れませう。――私の第一の結婚は十九歳の時でした。其時分私は田舎に居て、小學校を了ると直ぐ物固いお針の師匠の家に通つたものですから、若い男や女の風俗とは日々遠かり勝ちで、全くのおぼこと云ふのでありました。それ故、今日の女學生方のやうな早熟な愛情の發作は絶えて見られず、またそれを誘ひ出す機會にも接しなかつたものでした。それでも、當時私には多少の向上心があり、如何にしてか女學校に入學し、女子として獨立の出來る程に學問を修め、品性を研き實際智識を養ひたいと思つて居たのでありましたが、貧乏の爲に兩親が許して呉れませぬ。『お前に學問させる位なら、弟を中學校へ入れて、大學を卒業させる。』と申し、裁縫に通はせて貰ふ丈がまだしも幸福と思はねばならぬ位でした。兎角して居る内に、私に取つては迷惑な、母親に取つては有難い、一人の貰ひ手が顯はれた。もとは農家の子息でしたが、神戸の商業學校を卒業して以來商事に志し、私の家の近所に

立派な店に開いて、盛んに日用品を賣弘めて居た人でした。或日兩親は私を呼寄せて、『福がまわて來たぞ。容色好みでお前を是非新店の保三さんが欲しいとさ。』とほく／＼して居ります。私は厭でもなかつた。と云つて甚く好くのでもない。それから、親への義理立てに嫁に行くと云ふやうな心持も起らなかつた。私は只何となしに行つて見やうかと思つたのでした。だが、行くには此上勉強して有爲い人になる事は出來ない。これ丈は少し物足らず思はれたが、兩親や親族の人々は『大變に出世だ。』とか『女の子は矢張容色の好いのが德ですね。國枝さん有難く思はねば罰が當るよ。』とか、傍から不斷に煽動るので、さらでも幼稚な頭腦の、深く考へ直ほす餘裕もなく、つい『行つて見やう。』と云ふ氣になつたのであります。

保三の兩親は不服であつた。それは私の方が貧乏であつたからです。けれど、可愛い伜の希望と云ふので、終に澁々承諾致し、私は同時に保三の妻となつた。今日から思へば、無考への骨頂、此樣な無造作な夫婦が何處にあるものでせう。一方は容色を好み、一方は『行つて見やう。』――此樣な淺墓な見識で夫婦の重い根底が何處に築かれるものでせう。それは無論良人は愛し

てくれました。なれども、其の愛し方は眞の赤心から出たのでなくして、自分の見得の爲めに愛したのです。恰も座敷の床の間に美しい京人形を据ゑ、帶の間から金時計を見せて居るやうに、他人から羨まれるのを快しとして居たのです。縮緬の羽織の華美なのを作らへて貰ふのも、私自身が着るのでなくして、實は良人の見得が着るのであつた。斯樣な具合で十年餘りも經つ内に、私三十歲の坂を越す事となつて、うぶな色香は皆な失せる、皮膚の艶も消え去れば、若い血と肉とで張切つた兩の頰も衰える。而も三人の子供には自覺のない母となつて、何の方針もない見識もない育て方に其日々々を逐はれると云ふ始末。一方では性質が輕薄で移り氣多く、絕えて誠心誠意のない良人、盛りを過ぎた私の容色で以て、何しに辛抱が出來ませう。私が三度目の身持となると、良人はあるところで秘密に第二の私を作らへました。第二の私は十七八のうぶな美しい女の子でした。左樣、美しい女の子でした。私は良人の薄情に腹立つよりも、嫉妬の念に胸苦しう覺え

るよりも、美しい女の子の運命を思ふと、獨り涙に掻きくれたのであります。意地惡き貧、それが此子をして幼なき節操を汚さしめ、更に汚れた節操を賣物にして、男の前に媚びねばならぬ境遇に追やるのである。さても第二の犧牲者、私は寧ろ親身の姉妹の如く感じました。

私はもう此後の事に就て多く語るを好みませぬ。何となれば、事件が餘りに有ふれて居るからです。男に飽かれた婦人の落ちゆく先は大抵知れて居ます。日本の婦人は男子に愛されるべく、又飽かれるべく出來て居ます。自ら愛し、自ら飽くの權利と自由とは未だに附與せられてないのであります。縱、美しげに見える操てふ絹紐に縛られ、横、陰險な生活難のおとし穴に遮られて、進退の自由を失つて居るのが只今の婦人仲間であります。私は離緣されました。否、離緣されたのではない。此方からそれを欲したのであります。愛なき所に何の光明があらう。涙なき所に何の生命があらう。私は私の不束で十幾年の歷史を草紙のやうに

して了つた。容色好みと云ふ前提が既に業に深い禍根を藏して居るのに氣が付かなかつた。私が其家を出る時の勇氣は實に我乍ら見上げたものでした。涙金にとて與れました幾何かの金は、其場で投げ付けて顧みませんでした。そして目指す處は只東京、東京には一人の弟が母と二人の弟とを抱えて、小さやかな勤め人の生活を送つて居るのであります。最早父は居りませぬ。上京の途中、汽車の上で、私はどんなに悔恨の涙に咽んだでせう。併しまた希望の遠景を認め得ぬでもなかつた。當時の私の心中には再婚など云ふ考へのあらう筈もない。只目的の地にさへ着けば、今迄の失敗は奇麗に拭へるであらうと考へて居た。

あゝ、私は東京の人となつて、果して再生する事が出來たのでせうか。私は學校へも這入りたいと思つたけれど、弟の家計はこれを絕對に許さぬのであります。それのみか、僅かある月々の收入は、家内四人の糊口を支へるに動もすれば不足を感じ、幼弟の教育をさへ時には廢さねばならぬと思はれる位、窮乏する折があ

らうと云ふのです。此樣な哀れな一家の中に轉げ込んだ私、いくら薄命の身であるとしても、安々といつ迄遊んで居られる事でせう。私は編物も始めました。裁縫の內職も始めました。併しそれが如何程の收入でせう。私は終日役所に勤めて、休息に戻つて來る弟の力なき顏色を見るにつけ、胸は張裂けるやうに痛く思つた。あゝ、私はまあ何としたら好いだらう。

斯くて六七ヶ月、身を切る思ひに月日は送りました。若し私にして、今少し年が若く、今少し教育があつたならば、印刷局へでも這入つたでせう。電話の技手にもなつたでありませう。悲しい事には三十歲を越えた身に、新しい教育がない。一通りの教育は受けるには、相當の資金を要し、到底私一家の力では及ばぬのでありました。

或日、母は貧に窶れた底青い顏をして私に向ひ、「良い再縁の口があるから、早速極めたらよからう。」私は驚きました。『母樣さん再縁ですつて？』「はあ、縁付きもせずに獨りで食べて行かれますか。考へて御覽な

さない。」

此一句は私に取つて慥に致命傷でした。十幾年以前に一度强ひられた私は、又も同じ事を繰返さねはならぬ事となつたのです。私は着の身着の儘で、目下の處へ緣付きました。良人は四十二、亡くなつた先妻の子供が四人あり、姉娘はもう十六です。界隈では可也大きい白米屋で、屈强な雇人も四人居ります、私は朝六時から起きると、一日分の御飯、白米七升は一度に流つて煮るのであります。良人は空拳から今日の財產を作り上げた程の人故、經濟の事には針の目より細かく、朝から晩まで帳場に居つて算盤と首つぴきです。七升と云ふ米を一度に煮るのも、實は算盤から割出した考へで、二度にすればそれ丈薪が餘計に要る。それを一年に積れば何圓は慥に違ふと云ふ處まで、明細に勘定が出來て居るのであります。私の仕事は炊事と着物の綻びを縫ふ位で、店へ出ずともよし、日々の献立も大抵良人の計ひで出來る。私はこれでも此家へ緣付いて來て居るのか知らと、我乍ら不思議に思ふ事が度々あ

りますが、又々思ひ直して、何も不思議ではない。最初の嫁入には人形であつたのを、再緣の時には右の通り下婢と迄昇進して居る。人間となつたのは餘程有難く思はねばならぬと、斯う考へて心を宥めて居るのであります。それにつけても、能く〱私は愛情に緣なき女子よと思はれる。以前の良人は見得の愛、第二の良人は無愛情、今の良人の眞の妻は黃金で、身體中の愛の雫は、悉く絞つて金錢の上へ濺いで居ります。私は只この愛の脫殼、打てば響く利と云ふ金佛を精神以外の良人とし、間接に命を繋くよすがとして居るのであります。

斯くの如く貧が絕く迄身に附纒ふの結果は考へても〱恐ろしい無愛情、無精神の生涯を送り、只其日々々の生命を維持して行くと云ふ丈で、一日々々自分を殺しつゝあるのであります。あゝ、私は所詮、愛を知らずに死ぬる女でせう。さるにても、此の燃ゆるが如き胸の愛情は、果してどうしたものでせう。

四月の馬鹿遊び

在米　植村流星

これは昨年の本誌四月號にも出て居つたと思はれるが多少趣きも異ふやうに思はれるから、一通り書いて見ます。

四月の馬鹿遊びは April fool と言つて此遊戯は甚だ面白い。しかし時とすると興に乘じて兼好法師の書いた徒然草の中の『鼎被り』のやうになるから、餘り向ふ見ずに戯むれるのは御免だ。

さて毎年四月の月には、學校でも、家庭でも、往來でも、集會でも、時々帽子の上やら、上衣の背やら、袴の裾やらに馬鹿氣た御飾りを着けて居るものがある。之れは云ふまでもなく、無邪氣の子供逹が戯れに他人へ着けたもので、着けられた人は少しも知らないから、平氣な顏で澄まして居るのです。時とすると突拍子もない事柄を、まぢめに話したり手紙に書いたりして、正直に受けた人を困らせぬいた後で、はじめて其實際を聞かせて、大笑ひをするやうな罪なことをするものもある。

『ドウゾ、此の珍物を巴里の博覧會事務所へ送つて下さい』などと、麗々しく白紙へ書いて、背中へ張り付けられたものを見ると、誰でも吹き出さずには居られない。或は又小さな愛くるしい子供等が、あるだけの智慧を絞り出して、芭蕉の實の皮を丁寧に纏め『ドウゾ、一つ召し上れ』など丶、笑ひながら出すなどは、何となく面白味のあるものだ。『君、隣りの室で立派な御方が、君に逢ひたいと云ふて、待て居る』など丶云はれて上衣の塵を拂つたり髪の毛を直したりして、ハテ誰だらうなど丶考へながら隣の戸を叩いた時、まぢめな先生が、『何の用だ』と云ひながら、中から出て來る工合などは、話にも書にも書けたものではない。慰みも此の位では、そんなに罪の深いことではないが、水道の水をゴムの管で噴き出させて、頭の上から人を濡らしながら『四月の夕立で、驚きましたらう』など丶洒落られては、腹も立てられたものでない。兎も角も『四月の馬鹿遊び』は其の名の示す通り、一般に箸にも棒にもかゝらないのですから、人を馬鹿にしても、人に馬鹿にされても、腹を立てることもなく、腹を立ることも出來ませんが、流石は進歩的の米國だけありまして、仕事の邪魔や、勉强の妨げをするやうなことはない。大方は差支へのない場所や、遊ぶ時間などに戯れるので、思慮のある人は、餘り見苦しいことをせぬやうだ。

讀者より

▲米國より　一口に米國とは云ふものゝ、米國と云ふ國は皆様の御存知の通り大變に廣く國を横ぎるには早き大なる滊車にても一週間の行程故、中々一々見て廻ることは容易でないのです、私は未だ當米國に來て極新き計でなく、また一部を滊車で通りたのみで委しくは申されませんが、一體に申せば國が大きいだけに凡て國民が鷹揚で、又餘が多いだけに物事が大きいことはたしかです、第一家屋は皆三階以上にて高きは十五階迄有ります、故に一軒の家に數百人を收容します、而して國民の狀態は太平洋沿岸にては甚だ宜しく即ち生活が裕かで郵便配達など月に七十弗以上の收入で壹日二回配達すればよいんです、又歩行するにも鞄を肩にして背廣に中折帽と云ふ風で伸氣にふら〳〵歩き配達の家に着けば先づ角に立ちて鈴の釦を押して家人の戸を開くを見て「メール」と云つて渡すと云ふ狀態で、中々の月給取りです、又電車の車掌なども同一の風で中折帽ではないが、やはり新しき「カラ」などかけた中々の服裝で、郵便配達人と同等の月給取りです、で東京の如く一々切符を渡さない「プリース」と云ひ客に錢を得るや一々室の入口にある計算器の綱を引くと「チーン」と音がして自然に數字を表はすといふ仕掛です、巡査は亘く皆さんは繪で御覽でしようが高き兜を戴き胸に大きな記章を付けて居て、無學でも宜い只大なる體格を以て合格してると云ふ始末で、やはり中々伸氣です、時に町の甚しき混雜の所にては昔日本の巡査の持た様な短き棒を以て一々馬車や自働車の往復等に注意して居るが、概して甚だ其の數が少ない、勞働者は固より汚い着物を着て働いて居るが、それでも食物などは日本の中等に暮す人より好きものを食して居るのです、又日曜には大抵のものは皆休みにして、先づ五錢でもつて日曜新聞でも買つて、之れが勞働者とは思へないほど美しき相當の着物をつけて、公園にでも遊ぶんです、當地の日曜新聞と云へば、六七十頁もありて、時に美麗な繪附錄などありて、東京で出る新年の新聞などは側にもよれない程です、其れ故色々のことがありて一日を暮すにも充分です、凡て此んな風で乞食と云へばもう片輪のものゝみであります、こんな狀況ですから日本人などが來れば日本人は一日を安く食して從て勞働賃も安くてよき故、資本家は喜んで之れを用ゐる、從て米國の勞働者はたまらない、遂に生活上の競爭が起る、故に此頃では日本人排斥熱が盛んで、只今カリフォルニアの或議員が熱心に撿べて排斥案を上院にて盛にふりまくと云ふ始末です、それで桑港などの子供と來たら實に困る、道を歩きながら「ハロージャプ」「ジャプ、スケベー」など〻下等の語を以て日本人を嘲笑する、之れは未だしもだが、時に多くの小供が集まつてると、日本人に石を投げる、甚じきに至りては棒を以て逐ひて打つと云ふ狀であるから實に不快に感じる、先日も日本人が日曜の夜、劇場に遊びに行きて、丁度出場の時となり、數人の外人に馬鹿にせられ、遂に「ナイフ」を取り出し、一人の中小供の背に刀を刺して遂に巡査に捕へられたことすらある（下略）（一愛讀者）

▲摘草の興味　野遊はたゞに親子夫婦の愛情を增すための美事であるばかりでなく、又子供に多くの大切な知識を與へるものであります、とりわけ、摘草は其食物になるとならぬにかゝわらず、其の草の名稱を覺え、其の性質、效用生態等を知ることが出來ます。少し心ある親が其の根の形態、其の莖、葉、花、果實などの構造狀態を平易く說き示しますならば、子供はよろこんで之を覺えます。たとへば蹄豆や、みやこ草など豆の科の植物を取りて、其の花を一片づゝ分けて奇麗にならべて示し、其根にある丸き小さな粒を取りては、バクテリアの效能を話すなど母親や父親に少しでも植物學の知識があれば、遊ぶうちに、面白く子供に知識を與へることが出來ます。只今は唯植物にばかり就いて申しましたが、其他動物に就いても、礦物に就いても同じ事で即ち「野邊の學問」を爲るのであります（蜻蛉生）

▲五人の友人を代表して　私の親友が一昨年來五人他へ縁づきましたが、其中三人まで最早離婚、其中一人は只今奉公して居られます、一人は獨身主義を取り外國語學校に入つて居ります、又一人は實に氣の毒な身の上にて伯父の内に厄介になり、いつも私が慰めて居りますが、併し其罪は何處に有るでせう、實に女子に取ては結婚ほど恐るべきものは有ません（しげる子）

●由分社より

堺　利　彦

△深尾君の不在　本誌編輯の最も面倒なる、最も手數の掛る部分を擔任して居た深尾韶君が、去十五日夜、思ひがけなく警視廳の手に拘引せられ、引續き兇徒聚集の嫌疑を以て東京地方裁判所の豫審に附せられましたので、本號の編輯には少からぬ混雜を來しました。此事件は大抵新聞紙上で御承知でも御座いませう。東京市の電車會社が市民の便利を犠牲にして私益を計らうと致しましたので、日本社會黨の人々は他の有志の人々と共に、去十一日及び十五日の兩度日比谷公園に市民大會を開いて、反對の意志を表しました。然るに其大會に來集した者の中に石を投げたりなどして、多少の亂暴を働いた者がありましたので、警察は何か之を社會黨の陰謀の様にでも思ひましたものか、社會黨員十名と外に市民十數名とを拘引して、之に兇徒聚集の嫌疑といふ名をつけて、裁判所に告發したのであります。深尾君も即ち其一人であります。それで深尾君の不在中、小生は他の社友諸君の援助を得て、辛うじて本號の編輯を終りましたが、其混雜の爲め種々不整理の處もあり、又いろ／＼豫告に背いた處があります。其邊あしからず御諒恕を乞ふ。附記す、深尾君は目下市谷なる東京監獄に在りて、豫審の取調を受けて居ります。勿論遠からず放免となる事と信じます。

△「婦人新論」發行の遲延　前號にも「婦人新論」發行遲延のお詫を致して置きましたが、再び茲に同様のお詫を致さねばならぬ事と相成りました。それも矢張り右の電車事件の影響であります。最初二月中旬迄には是非書きあげる心組であつたのが、「社會主義研究」新刊のドサクサまぎれに其意を果さず、次に三月初旬には必ずと思つて居たのが、又電車事件の市民大會騒ぎで思ふに任せず、其中とう／＼社會黨の同志十名の拘引となりたる爲め、家庭雜誌の編輯も二倍の忙がしさとなり「光」の編輯も手傳はねばならぬ事となり、拘引されたる人々の留守宅の見舞もせねばならず、其外、之に關する用事山の如く、此分にては暫くの處、到底小生の筆の餘裕はありそうに思はれませぬ。と申して、定期の刊行物を後らす譯には參りませぬので、それ丈は是非とも發行して行く覺悟でありますが「婦人新論」だけは當分延期として置くの外はありませぬ。毎度廣告を致して置いて、斯様の次第に相成りましたは、著者として、發行者として、實に申譯の無い事でありますが、右の事情御汲取の上、悪しからず御諒恕願ひあげます。

△書籍取次販賣　は諸君と本社と共に便益を得るのでありますから成るべく手廣くやりたいとは思ひますが、本誌に取次の廣告の出してない書籍を御注文下されては、少々手が届きかねます。それだけは只今の處御用捨を願ひます。

こども博覧會概則

一　本會は、「こども」に關する古今東西のあらゆる製作品を蒐集して、これを公衆の縱覽に供し、學校及び家庭の教育上に資すると同時に、子供に清新なる娯樂を與へんことを期す。

二　本會は教育學術研究會の事業として、來る明治三十九年五月三日より同月十六日まで二週間、東京上野公園第五號館に於て開設せんとす。

三　本會の組織を左の各部に分つ。

第一部（圖書、繪畫、寫眞、彫刻品、文房具類、）
第二部　衣服調度類、）
第三部（體操、音樂に要する諸器械類、食料品、住居に關するもの、）
第四部（玩具、遊戯に關するもの、）
第五部（兒童の製作品、即ち子供の文字、繪畫、作文手工品、手藝裁縫品等、）
第六部（以上の各部に漏れたるもの、並びに參考品、）

四　本會には會長一名を戴き、且つその事務を處理するために、幹事若干名を置く。

五　本會は、内外朝野の篤志家に贊助を求め、且つその出品を乞ふものとす。

東京市神田區表神保町二番地
教育學術研究會内
こども博覧會

nani mo sono ue kairyō wo hakaru ni oyobanai to shinzuru mono de aru. Tamatama manako no aita hito ga atte rigai wo tokikikashite-mo nakanaka mimi ni hairanai nominarazu, sore wa furui shikitari wo yaburu zoku de aru to nikumu made ni naru. Jitsuwa sonna manako no kurai koto dewa senzo nimo sumanai to yū koto ni ki ga tsukanai no de aru.

Kanji mo yokunai, kana mo fusoku de aru, korera ni kuraberu to rōmaji no hō ga masatte iru koto wa akiraka de aru no ni, tada shūkan no oshitōshi de fubenna mono wo tsukatte iru koto bakari ni me wo tsukete, oya nimo, senzo nimo shinno kōkō wo shiyō to kokorogakenai no wa, chōdo oya ga kajiya datta kara kajiya de yaraneba naran to, ikkō toku no nai no ni, yasegaman wo harinagara, mi wo tsukarashi, takara wo ushinai, shimai niwa ie wo mazushiku suru awarena hito no gotoku de aru.

Rômaji to Dempô.

WATANABE TONOSUKE.

Waga kuni no hôrei no naka de Rômaji wo kaku koto wo ôyake ni yurushita mono wa osorakuwa Meiji 33 nen Teishin-shôrei dai 46 gô Dempô Kisoku to iu mono tada hitotsu de arô. Dempô wo kaku ni mochiiru kotoba wa, futsûgo, himitsugo, kakushikotoba no 3 iro de aru ga, Dempô kisoku dai 11 jô ni "Rômaji de shirushita Nippongo wa kore wo futsûgo to minasu" to iu imi no sadame ga atte, Rômaji de tsuzutta Nippongo no dempô wo yurusu koto ni notte iru no de aru. Soshite sono kakika tawa dai 17 jô de kimatte iru, sunawachi sono dai 1 kô ni "Rômaji de tsuzutta Nippongo no dempô wa 15 ji wo koete tsuranegaki wo shitari, mata hitotsu no goku no nakahodo de wakachigaki wo suru koto wo yurusanu" to iu imi no sadame ga aru. Yueni, "Otegami no koto *Shôchishimashita*" to iu bunshô ni oite, "shôchishimashita" no kotoba wa 15 ji wo koete iru kara, hoka no kotoba ni torikaeru ka, matawa "shôchi" to "shimashita" to nado futatsu ni wakete kaku hitsuyô ga atte, chotto mendô no yô de ari, mata Rômaji dempô dewa uketorinin no tokoro ya namae ga dempôryô wo haraubeki kotoba no kazu no uchi ni keisansareru yô de aru. Shikashinagara Rômaji dempo dewa kotoba to kotoba to ga akirakani kubetsusareru rieki ga aru ue, Rômaji dempô wa kotoba no kazu ni yori, katakana dempô wa moji no kazu ni yotte dempôryô ga kimaru kara ryôhô no aida dempôryô wa taishita chigai ga naku, mushiro Rômaji no hô ga yasui koto mo arô. Sorede Rômaji Hirome Kai no kaiin ga dempô wo dasu niwa narubeku Rômaji dempô wo mochiiru koto ni shitai. Kono dempô ga hayaru yô ni nareba, Dempô Kisoku no ue de Rômaji no kakikata ya kotoba no kazu no keisan ni tsuite, masumasu benri wo ataerareru yô ni naru de arô. ("Rōmaji" yori.)

RÔMAJI RAN

Mukashi kara tsutae-kitatta mono wa subete mamoraneba naran ka?

FUJIOKA KATSUJI.

Misoya no ko wa misoya ni naraneba naran ka? Kajiya ni umaretara kanarazu kajiya ni naraneba naran ka? Donna ni shō ni awanakutemo kitto oya no shokugyō wo tsutaeneba naranka? Oya no shōbai wo uketsuganeba kōkō de nai ka? Ie no shikitari wo kaeru no wa donna koto demo, subete senzo ni fukō ni naru ka? Senzo no shōbai dakara to itte, ima wa mō taihen reiraku shite ite totemo sore wo yatte ite wa sekennami ni tsukiai mo dekinai hodo demo, yappari sore ni kuttsuite ite kanashii shōgai wo okuraneba naran ka? Oya wa ko ga shōbai wo kaeru no wo iyagatte, kaereba kanarazu shiawase ga fueru no wo tomeru hodo jaken de yoi darō ka? Senzo wa shison ga sakaeru no wo yorokobu. Ko wo aisuru oya wa sono ko ga shōbai wo kaetemo, shiawase no fueru koto wo yorokobu. Kashikokatta senzo no mitama wa shison ga shōbai wo kaeru no ni guchi wo koboshi wa shinai, tomokakumo ie no hanjō wo negau mono de aru.

Ishin no tōji shodaimyō ga senzo denrai no ryōchi wo kami ni sashidasu no wo iyagattara dō darō? Shōgun ga akumade Tokugawa no bakufu wo mamoritai to oshitōshitara dō nattarō? Konnichi no yō ni kuni ga hirakenakatta wa mochiron, shodaimyō no sue mo, shōgunke no ato mo iyoiyo aware ni omomuita ni sōi nai, shokoku ni chi wo nagasu sawagi mo nakanaka taenai darō. Yo no ikioi to jisetsu no arisama ni shitagatte, senzo kara no yari naginata wo sute, yoroi kabuto wo nuida tokoro ga, sono mama, mi no tame, shison no tame, mata senzo no tame, hiite wa mattaku kuni no tame ni natta koto wa utagai no nai tokoro de aru. Shinni senzo wo omou hito, hontōni senzo no kokoro ni kanai, kore wo yorokobasō to omou hito no nasu tokoro wa kō nakutewa naran.

Arikitari no narawase da kara to itte sore wo mamotte bakari iru no wa marude shinpo no kangae no nai mono no suru koto de, hattatsu no nozomi no nai awarena hito to iwanakereba naran. Furuki wo mamoru koto ga kanarazushimo warui koto dewa nai; sore mo mata taisetsuna koto no hitotsu dewa aru ga, sore dake de wa sarani susumanai koto de aru.

Yoi mono wa aratameru ni oyobanai no wa iwazu tomo shireta koto de aru keredomo, hito wa tokaku narekitatta koto, furuku kara tsutaekitatta koto niwa yoshiashi no funbetsu ga tsukikaneru mono de, ōku wa sonnani yoi koto de nakutemo yoi to omoikomi-yasui. Kono omoikomi ga hiroku okonawarete ireba masumasu anshin wo shite,

◉新刊紹介

▲運命（國木田獨歩著）　短篇小說九篇を收めたる美麗の册子なり、著者獨歩氏は文壇の流行兒にあらざれども、別に一流の趣味を持して其の才筆を揮へり、彼が文壇に成功せざるだけ彼に取る所あるを知るべし、「運命論者」「酒中日記」「馬上の友」「空知川の岸邊」「非凡なる凡人」等、命名既に奇なるを見よ（價七十五錢、京橋銀座左久良書房）

▲品性論　竹村修譯）　スマイルスのキャラクターを譯したるもの。此書は嘗て一たび自助論と共に中村敬宇氏の手に譯されたるもの。されど自助論ほど廣く世に行はれざりしに依り今は殆んど新譯の感あり。而して或人の如きは、自助論よりも寧ろ此書を取ると云へり。吾人は其の餘りに個人主義的なるの點に於てスマイルスを好まざる者なれども、されぱとて此書が少年立志の爲に有益の書なるを拒むを能はず。（價四十錢、（內外出版協會）

▲應用骨相學（市川紀元二遺著）　工學士にして步兵中尉となり滿洲に戰死したる市川氏の遺著といふに於て先づ此書に尊敬と同情とを寄せざる可らず、內容は吾人の批評し得る限に非ず（價廿五錢、內外出版協會）

家庭雜誌第四卷第一號一月一日發行目次

△理想の影（詩）△我輩の家庭主義（堺利彥）△眞心のお年玉（安藤生）△嬖アの皮（深尾韶）△臺所廢止論（中尾余瀨）△動物虐待税（祿亭生）△花言葉（久田二葉）△日本服の將來（韶）△炬燵雜談（塀の上の柿、エスペラント語、男子中心の態度）（彥）△老父母を迎ふるの記（西村渚山）△北海道の冬の生活（韶）△ローマ字欄等

家庭雜誌第四卷第二號二月一日發行目次

△死にゆく母に代りて（詩）△醜惡なる家庭（深尾韶）△謎の指環（西村渚山）△滑稽の研究（中尾余瀨）△火の中に住むの記　竹內余所次郎）△春の料理（石井癸次郎）△婦人と園藝（久田二葉）△火州庵小信（まがりかね生）△良妻賢母主義（堺利彥）△炬燵雜談（旅行の利益、宿屋と我家、能樂見物、狂言「釣針」、家庭の厚氷、嫁さん、盜み食、革女天才の束縛、柔順の美德？、傍若無人の言、革命的戀愛）（彥）△雪姬物語（上）（白柳秀湖）△婦人新論の序（彥）△ローマ字欄等

家庭雜誌第四卷第三號三月一日發行目次

△僕の夢（彥）△婦人と經濟的平等（堺利彥）△春雨日記（ふかを生）△反抗の聲を擧げよ（深尾韶）△女子の威嚴に就いて（中尾余瀨）△家庭時言（久田二葉）△臟器料理（大石祿亭）△炬燵雜談（異人種結婚、金子コンガー夫人、波蘭の珍客、愁ひは無用なり等）（彥）△思ひも寄らぬ便り（安藤曲川）△初春の草花（二葉）△雪姬物語（中）（白柳秀湖）△讀者より△新刊紹介△春の料理△ローマ字欄△由分社より

本誌代價	一部金十錢 六ヶ月前金五十五錢 一ヶ年前金壹圓 （何れも郵税共）
廣告料	特別一頁十圓 普通一頁七圓

▲本誌は每月一回（一日）發行とす。

▲代價は小爲替を以てお送り下さい。郵券代用ならば五厘切手で一割增に願ひます。

▲御注文の時は必ず何卷何號より何號まで何册の前金と明瞭に御記載を願ひます。

▲御手紙には必ず住所姓名をハッキリとお書き下さい。又御轉居の際は新舊の宿所を併せて御通知を乞ふ。

▲本誌は前金でなくては一切御註文に應じませぬ。前金の切れた時には帶封に「前金切」と朱印を捺して上げますから御注意下さい。

▲歐米諸國よりの御注文は別に一册に付二錢づゝの郵税を申受けます。

明治三十九年三月廿九日印刷
明治三十九年四月一日發行

東京市麹町區元園町一丁目廿七番地
發行兼編輯人　堺利彥

東京市京橋區日吉町十番地
印刷人　中村彌助

發行所　東京市麹町區元園町一丁目廿七番地　[illegible]社

大賣捌所　[illegible]

五冊前金七十錢 ○ 十冊前金一圓三十錢（郵税共）
明治卅九年 四月十五日發行 價十五錢

堺利彦編輯

社會主義研究

第二號

THE STUDY OF SOCIALISM

APRIL 15, 1906.—No. 2.

要目

△吾黨運動の機關としては既に『光』の在るあり。本誌の目的は、斯主義の理論、歴史、運動等につき、稍や精細深邃なる智識を供給せんとするに在り。

△本誌の體裁は正に此の廣告に同じ。雜誌店の店頭に立つ者は、萬國社會黨の旗幟たる鮮血色の表紙に依りて、直ちに本誌を見出すを得べし。

* * *

"In every historical epoch, the prevailing mode of economic production and exchange, and the social organisation necessarily following from it, form the basis upon which is built up, and from which alone can be explained, the political and intellectual history of that epoch."

— KARL MARX.

* * *

發賣所 東京市麹町區元園町一丁目二十七番地 由分社

由分社發行書籍目録

（十錢以下の御注文には別に郵税二錢を要す）

- 社會主義神髓（幸德秋水氏著）價二十錢
- 社會民主黨建設者 ラサール（幸德秋水氏著）價十五錢
- 革命婦人（平民社同人編）價十二錢
- 百年の後の新社會（堺利彦抄譯）價五錢
- 理想鄉（堺利彦抄譯）價五錢
- 通俗社會主義（堺利彦譯述）價二錢
- 少年叢書 目のある人（堺利彦著）價十錢
- 婦人新論（堺利彦著）價五十錢
- 社會主義問答（四月一日發賣）（堺利彦著）價一錢
- 社會主義の詩（由分社編）（四月一日發賣）價五錢
- 小供の社會主義（近刊）
- 社會主義小話（近刊）
- 社會主義の話（深尾韶著）發賣禁止 價一錢
- 月刊 社會主義研究（堺利彦編輯）價十五錢
- 家庭雜誌合本（第二卷）價五十錢（第三卷）價八十錢

發行所 東京市麴町區元園町一丁目 由分社

由分社取次販賣書籍目録

（十錢以下の御注文には別に郵税二錢を要す）

- 社會主義入門（平民社同人編）價十錢
- 經濟進化論（田添鐵二氏著）價十五錢
- 富の壓制（西川光二郎氏著）價十錢
- 土地國有論（西川光二郎氏著）價十錢
- 消費組合の話（石川三四郎氏著）價十二錢
- 地上の理想國 瑞西（安部磯雄氏著）價十五錢
- 英國勞働界の偉人 バアンス（西川光二郎氏著）價五錢
- 普通撰擧の話（西川光二郎氏著）價一錢
- 廿世紀の怪物 帝國主義（幸德秋水氏著）價廿五錢
- 小說 火の柱（木下尙江氏著）價卅五錢
- 小說 良人の自白 上中下全三册（木下尙江氏著）價壹圓
- 小說 勞働問題（堺利彦譯）價卅五錢
- 家庭の新風味（堺利彦著）價壹圓
- 家庭夜話（堺利彦編）價壹圓
- 枯川隨筆（堺利彦著）價二十錢
- 言文一致 普通文（堺利彦著）價廿五錢
- 我家の犬猫（堺利彦著）價八錢
- 小品文集 半生の墓（堺利彦著）價卅五錢
- 小品千題 智識と趣味（新波貞吉氏編）價卅五錢
- 少年少女 新遊戲集（西村渚山氏著）價廿五錢
- 社會主義名士肖像 畫葉書（一組六枚）價十錢
- 詩集 わか草（樋口龍天著氏）價三十錢
- 社會主義概評（島田三郎著氏）價三十錢
- 社會黨（西川光二郎著氏）價二十錢
- トルストイ翁 日露戰爭論（平民社譯）價八錢
- 英文 社會主義書類 別項の廣告御覽を乞ふ新著の書籍數種あり

取次所 東京市麴町區元園町一丁目 由分社

歯科治療 自午前八時 至午後六時

神田區須田町二十六番地

歯科醫 吉瀬才市郎

勞働者諸君に限り藥價診察料共に御隨意

晝間執業者の便利上夜間十時迄治療仕候

眼科診察 毎日午前

京橋南佐柄木町五

(電話新三四五八)

川上眼科院

外科皮膚病 梅毒 痔瘻 外科的婦人科尿道器械的療法

診察 午前九時より十二時まで

東京 新橋際 出雲橋 加藤病院

院長 獨國醫學士 加藤時次郎

分院 横濱神奈川臺。火木土午後三時至六時

小田原海岸 毎月曜午前中

磯部

日本橋濱町三の一

外科皮膚病

梅毒痔瘻

診察 午前

検三

中の橋通り東入



腦病 靜靖丸 頭痛

腦力を明快にし腦病神經病を全治す

腦病 にて常に頭重く、記憶弱力く、忍耐力薄く、氣鬱ぎ、不眠、頭痛を煩ふ人

神經 症にて僅の事を苦慮し、常に動悸、息ぎれを感じ怒り易く、悲み易く、心弱き人

逆上 症にて常に顔紅く、頭痛、眩暈し、耳鳴目かすみ、肩凝り背重く、便通少なき人

頭痛 症にて學生の常に煩ふ勉學性頭痛、感冒、徹夜、苦慮等より發する者其他總ての頭痛及び頭痛持の人

不眠 神經家又は老人等の夜分安眠を得ざる人、亦は苦慮、悲痛、等にて眠むられざる人

其他常に腦を勞する人及神經家亦は大酒家、肥滿家は持藥として此藥を服用せらるべし腦力を強健にし精神を快活ならしめ、中風、卒中風を豫防する希有の偉効あり、

藥價 二日分弱金拾錢　廿二日分（常備用）金壹圓　十日分金五拾錢　六日分金三拾錢　四日分金貳拾錢

本舖　東京市日本橋區 藥研堀町　藥劑師　高木與八郎

逆上を引下げ睡眠を催し頭痛を即治す

家庭雜誌第四巻第三號　明治三十六年四月五日第三種郵便物認可　明治三十九年四月一日發行

慈善券

ライオン歯磨小袋入に添付せり詳細は
實物に就き御承知あらんことを乞ふ

北米セントルイス萬國博覧會

名譽銀牌受領

發賣元 東京 小林富次郎



發兌元 大阪 小林支店

粉製 **赤罐入** 發賣

意匠嶄新且つ優美なる彩色罐入にして頗る携帯に便なり

能く香氣の發散を防止し終に至る迄本品獨有の佳香を保つを得べし

遠征の士其他旅行用に適せり

定價一箇拾貳錢

印刷所　東京市京橋區日吉町十番地　近藤商店